Japan Foundation for
Regional Art・Activities

令和４年度
公共ホール音楽活性化事業
報　告　書
CONCERT&ACTIVITY

一般財団法人地域創造

はじめに

一般財団法人地域創造では、地域における創造的な文化・芸術活動のための環境づくりを目的として、地方公共団体等との緊密な連携の下に、地域における文化・芸術活動を担う人財の育成、公立文化施設の活性化支援情報提供、調査研究などの事業を実施しています。

これらの事業の一環として、地域創造では平成10年度から「公共ホール音楽活性化事業」（通称：おんかつ）を実施しています。

この事業は、全国オーディションで選ばれたクラシック音楽のアーティストと専門家のコーディネーターを公共ホールに派遣し、アーティストとホールが共同で企画した学校・福祉施設等での地域交流プログラムと、ホールでのコンサートを実施するものです。地域創造では、この事業を通じて、公共ホールの利活用やホールスタッフの企画・制作能力の向上、創造性豊かな地域づくりを支援しています。

令和４年度は、13団体で実施する予定でしたが新型コロナウイルス感染症の影響により１団体で中止となり、12団体での実施となりました。

この報告書は、12の団体との共催により実施された「令和４年度公共ホール音楽活性化事業」の各地の取り組みを取りまとめたものです。報告書の中では、実施団体からの報告に加え、担当された方の事業を実施しての成果や反省点・課題を掲載しています。また、各団体に派遣されたコーディネーターのレポートを掲載し、事業に関係して気付いた点や企画・制作のノウハウや事業を実施する過程において生じた様々な課題や問題点をケーススタディとして記録するように努めました。

この報告書が公共ホールで自主事業に取り組む方の参考となり、企画・運営のお役に立てば幸いです。

終わりに、この事業を主体的、積極的に実施していただいた実施団体、各地域に寄り添ったプログラムを実施していただいたアーティスト、事業の実施にあたり貴重なアドバイスやご尽力をいただいたコーディネーター、一般社団法人日本クラシック音楽事業協会、その他多くの関係者の皆様方のご協力のもと、令和４年度の事業を終了することができましたことに対して、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

一般財団法人地域創造

目次

〈本文中の社名、所属、役職等は令和４年度のものです〉

第１部　令和４年度公共ホール音楽活性化事業の概要
実施概要…… 2
登録アーティスト／コーディネーター／実施団体…… 3
全体研修会実施概要…… 5

第２部　令和４年度公共ホール音楽活性化事業　事例紹介・レポート
角田市　（宮城県）…… 8
牛久市　（茨城県）……13
木更津市　（千葉県）……19
成田市　（千葉県）……25
甲斐市　（山梨県）……30
伊賀市　（三重県）……36
舞鶴市　（京都府）……40
東大阪市　（大阪府）……45
海田町　（広島県）……51
丸亀市　（香川県）……58
佐世保市　（長崎県）……64
宇佐市　（大分県）……70

第３部　令和４年度公共ホール音楽活性化事業　コーディネーター・アドバイザーレポート
小澤　櫻作　（チーフコーディネーター）……76
丹羽　徹　（コーディネーター）……78
花田　和加子　（コーディネーター）……80
山本　若子　（コーディネーター）……82
赤木　舞　（コーディネーター）……83
仕田　佳経　（コーディネーター）……85
大澤　寅雄　（アドバイザー）……87

第１部
令和４年度公共ホール音楽活性化事業（おんかつ）の概要

令和４年度公共ホール音楽活性化事業　実施概要

１　事業趣旨

全国オーディションで選ばれたクラシック音楽のアーティストと専門家のコーディネーターを、公共ホールに派遣し、アーティストとホールが共同で企画した学校・福祉施設での地域交流プログラムと、ホールでのコンサートを実施する。また、本事業を通じて、公共ホールの利活用やホールスタッフの企画・制作能力の向上、創造性豊かな地域づくりを支援する。

２　実施内容

（１）実施団体　全国12団体（新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、申請13団体のうち、１団体が中止）

※地方公共団体または指定管理者等。原則として都道府県と政令指定都市及びそれらが関わる指定管理者等は除く。

（２）研修事業　①全体研修会

令和４年４月18日（月）～ 20日（水）／（一財）地域創造、トッパンホール

開催地の公共ホール・企画担当者等を対象とした研修。

②個別研修の実施

広報を始める前の段階（公演2,3カ月前）に、担当コーディネーターが現地での事前打ち合わせ等を行い、事業の円滑な実施のための助言を行った。

（３）公演事業　公演事業の実施（全国12地域）　令和４年10月～令和５年３月

登録アーティストと共演者を数日間の日程で地域に派遣し、開催地の公共ホールとの共催でコンサートおよびアクティビティを実施した。

①　コンサート　　身近で、親しみのあるクラシック演奏会

②　アクティビティ　　出前コンサート、レクチャー、ワークショップ等地域との交流を図るプログラム

３　経費負担

一般財団法人地域創造と開催地の地方公共団体との経費区分は下記の通りとした。

（１）一般財団法人地域創造が負担する主な経費

①演奏家及びコーディネーターの派遣に係る経費

（演奏家の出演料、交通費（現地移動費を除く）、宿泊費、日当、楽器運搬費、保険料（演奏家）、演奏家派遣に関するマネジメント料）

②地域との交流を図るプログラムの実施に係る経費のうち10万円を負担

（２）開催地の地方公共団体が負担する主な経費

演奏家の派遣に係る経費以外に係る経費（現地移動費、舞台制作費、広報宣伝費、全体研修会への参加旅費など）

４　主催・共催等

主　　催：開催地の地方公共団体等

共　　催：一般財団法人地域創造

制作協力：一般社団法人日本クラシック音楽事業協会

令和４年度公共ホール音楽活性化事業
登録アーティスト／コーディネーター／実施団体

１　令和２‐４年度登録アーティスト

齊藤　一也	（ピアノ）	株式会社東京コンサーツ
石上　真由子	（ヴァイオリン）	株式会社プロ アルテ ムジケ
梅津　碧	（ソプラノ）	株式会社1002
竹多　倫子	（ソプラノ）	株式会社二期会21
新野　将之	（打楽器）	株式会社東京コンサーツ
高橋ドレミ＆實川風ピアノデュオ	（ピアノデュオ）	MIYAZAWA&Co.

２　コーディネーター

小澤　櫻作　（上田市交流文化芸術センター プロデューサー竹田市総合文化センター グランツたけた チーフプロデューサー）
丹羽　徹　（一般社団法人日本クラシック音楽事業協会 常任理事 事務局長）
花田　和加子　（keynote代表、ヴァイオリニスト）
山本　若子　（有限会社N.A.T取締役）
赤木　舞　（昭和音楽大学、武蔵野音楽大学他、講師）
仕田　佳経　（一般財団法人地域創造ディレクター）

３　サブコーディネーター

菊地　俊孝　（一般財団法人日本民間公益活動連携機構プログラム・オフィサー）
三浦　幸恵　（公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場 音楽制作担当）
桜井　しおり　（ワークショップ・アーティストおとみっく共同代表、東京文化会館ワークショップ・リーダー）
佐野　秀典　（作編曲家、公益財団法人東京都交響楽団ほか）
佐藤　良子　（芸術文化観光専門職大学 研究支援コーディネーター）

４　アドバイザー

大澤　寅雄　（株式会社ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室）

５　アシスタント

栄　咲季　（公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化会館 事業企画課 事業係）
古橋　果林　（音楽ワークショップ・リーダー／ファシリテーター、東京藝術大学 国際芸術創造研究科 教育研究助手）
山路　順子　（公益財団立川市地域文化振興財団文化事業係）
松井　真理子　（神奈川芸術劇場 KAAT EXHIBITION コーディネーター）

6　実施団体

No	都道府県	市町村	実施団体	開催会場	開催時期	アーティスト	コーディネーター
1	宮 城 県	角田市 （かくだし）	角田市教育委員会	かくだ田園ホール	令　和4年12月15日（木）～ 12月18日（日）	竹多　倫子	花田　和加子 山路　順子
2	茨 城 県	牛久市 （うしくし）	牛久市	牛久市中央生涯学習センター 文化ホール	令和 5 年2月24日（金）～ 2月26日（日）	新野　将之	赤木　舞 佐野　秀典
3	千 葉 県	木更津市 （きさらづし）	木更津市	木更津市民会館 中ホール	令和 5 年2月2日（木）～ 2月4日（土）	新野　将之	山本　若子 桜井　しおり
4	千 葉 県	成田市 （なりたし）	成田市	成田市文化芸術センター スカイタウンホール	令和 4 年12月1日（木）～ 12月3日（土）	新野　将之	花田　和加子 松井　真理子
5	山 梨 県	甲斐市 （かいし）	公益財団法人やまなし文化学習協会	甲斐市双葉ふれあい文化館	令和 5 年3月9日（木）～ 3月11日（土）	齊藤　一也	丹羽　徹 三浦　幸恵
6	三 重 県	伊賀市 （いがし）	公益財団法人伊賀市文化都市協会	あやま文化センター	令　和4年10月31日（月）～ 11月3日（木・祝）	竹多　倫子	仕田　佳経 菊地　俊孝
7	京 都 府	舞鶴市 （まいづるし）	舞鶴市	舞鶴市総合文化会館	令 和5年1月20日（金）～ 22日（日）	新野　将之	山本　若子 佐藤　良子
8	大 阪 府	東大阪市 （ひがしおおさかし）	PFI東大阪文化創造館株式会社	東大阪市文化創造館	令　和4年11月24日（木）～ 11月26日（土）	石上　真由子	赤木　舞 栄　咲季
9	広 島 県	海田町 （かいたちょう）	海田町	織田幹雄スクエア	令 和5年1月19日（木）～ 1月22日（日）	梅津　碧	仕田　佳経 桜井　しおり
10	香 川 県	丸亀市 （まるがめし）	公益財団法人丸亀市福祉事業団	丸亀市綾歌総合文化会館	令 和5年1月27日（金）～ 1月29日（日）	石上　真由子	丹羽　徹 古橋　果林
11	長 崎 県	佐世保市 （させぼし）	公益財団法人佐世保地域文化事業財団	アルカスSASEBO	令 和5年2月2日（木）～ 2月4日（土）	石上　真由子	小澤　櫻作 山路　順子
12	大 分 県	宇佐市 （うさし）	宇佐市院内文化交流ホール30周年記念事業実行委員会	宇佐市院内文化交流ホール	令　和4年10月21日（金）～ 10月23日（日）	新野　将之	山本　若子 栄　咲季

※福島県白河市は、新型コロナウイルス感染症の影響により中止。

令和４年度公共ホール音楽活性化事業　全体研修会実施概要

１　概要

令和４年度の実施団体担当者を対象として、当事業の基本的な考え方、過去の事例紹介などのゼミを開催した。２日目には登録アーティストによる演奏とトークのプレゼンテーションと交流会を実施し、最終日はグループに分かれて企画検討会議及び発表を行った。

２　参加者

令和４年度事業実施団体　担当者

３　日程

令和４年４月18日（月）～20日（水）（３日間）

４　会場

４月18日（月）、19日（火）午前、20日（水）：一般財団法人地域創造 会議室
４月19日（火）午後：トッパンホール

５　実施団体研修スケジュール

4月18日（月）

時　間	会　場：地域創造　会議室
13：00～13：10	オリエンテーション
13：10～14：40	ワークショップ
	森下真樹　（ダン活支援登録アーティスト）
休憩（20分）	
15：00～15：30	おんかつを知る Vol. 1　～基礎編～
	小澤 櫻作
15：30～16：00	おんかつを知る Vol. 2　～実務編～
	地域創造
休憩　（10分）	
16：10～16：55	おんかつを知る Vol. 3　～事例紹介編～
	Ⅰ.R1年度事例：後藤 和泉（氷見市）、山本 若子
休憩（10分）	
17：05～18：05	Ⅱ.演奏家事例：酒井有彩、糸賀修平（おんかつ支援登録アーティスト）、丹羽 徹、花田 和加子
休憩（10分）	
18：15～19：00	Ⅲ.事業担当者の役割とは：仕田 佳経

4月19日（火）

時　間	会　場：地域創造　会議室／トッパンホール
10：00～11：30	おんかつから始まるホールと地域の未来
	大澤 寅雄
休憩（60分）	
12：30～14：00	フィードバック～これまでのゼミを振り返って～
	小澤 櫻作、丹羽 徹、花田 和加子、山本 若子、赤木 舞、仕田 佳経
14：00～14：10	プレゼンテーションの聴き方
	小澤 櫻作、丹羽 徹、花田 和加子、山本 若子、赤木 舞、仕田 佳経
移動（40分）	

15：00 ～ 17：25	2020-2022年度登録アーティスト公開プレゼンテーション 竹多　倫子　（ソプラノ） 齊藤 一也　（ピアノ） 梅津　碧　（ソプラノ） 休憩（20分） 新野　将之　（打楽器） 石上　真由子　（ヴァイオリン）
休憩（35分）	
18：00 ～ 19：30	交流会

4月20日（水）

時　間	会　場：地域創造　会議室
10：00 ～ 12：00	グループ別企画検討
	小澤 櫻作、丹羽 徹、花田 和加子、山本 若子、赤木 舞、仕田 佳経
昼食休憩　（60分）	
13：00 ～ 15：00	企画発表～フィードバック
	小澤 櫻作、丹羽 徹、花田 和加子、山本 若子、赤木 舞、仕田 佳経
15：00 ～ 15：10	事務連絡
15：10	閉講式

第２部
令和４年度公共ホール音楽活性化事業（おんかつ）事例紹介・レポート

実施団体：角田市教育委員会
実施時期：令和４年12月14日（水）～令和４年12月18日（日）
出演アーティスト：竹多　倫子（ソプラノ）　辻田　祐希（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：角田自治センター　クリスマスコンサート
期　　日：令和４年12月15日（木）　10：00～11：00
会　　場：角田自治センター　ホール（夢）
参 加 者：一般　35名

角田自治センターを利用するサークル団員を中心に参加いただいた。

市内中心地の駅が会場となったため、ホールに足を運ぶお客さんも多く参加いただき、ホール公演とは違った身近で親しみやすい空間で楽しんでいただいた。

タイトル：西根自治センター　クリスマスコンサート
期　　日：令和４年12月15日（木）　15：00～16：00
会　　場：西根自治センター　ホール
参 加 者：一般　41名

ホールのある市内中心地からは遠方の西根地区の近隣住民の方々に参加いただいた。

普段はホールに来られない方が多く、こういった本格的なクラシックコンサートを初めて聞いたというお声をいただき、数名ではあるが、ホール公演にも来場する方が見られた。

タイトル：高齢者サロン　ひだまり　クリスマスコンサート
期　　日：令和４年12月16日（金）　11：00～12：00
会　　場：高齢者サロン　ひだまり　ホール
参 加 者：一般　38名

高齢者サロンとして、自発的に健康体操や手芸等の活動をしている方々に参加いただいた。顔見知りのメンバーと積極的な活動をしていることもあり、アクティビティでも積極的に参加し、楽しんでいる様子が見られた。

タイトル：角田児童センター　クリスマスコンサート
期　　日：令和４年12月16日（金）　15：30 ～ 16：30
会　　場：角田児童センター　ホール
参 加 者：小学生　36名　（３年生８名　４年生９名　５年生８名
　　６年生11名）

市内小学校の放課後に集まる児童センターでのアクティビティを行った。

小学校高学年が中心となり、初めて聞くソプラノに驚きながらも貴重な経験となったように見られた。中でも普段からピアノを弾く男は、「今度演奏会を開く」と目標になったアクティビティとなった。

コンサート

タイトル：竹多倫子　ソプラノコンサート
期　　日：令和４年12月18日（日）　14：00 ～ 16：00
会　　場：かくだ田園ホール　　ホール
参 加 者：一般　96名　高校生以下　５名

市内を中心とした来場者計101名の来場となった。

３割程は４回のアクティビティに参加した方が来ていたことから、実際にアクティビティまで足を運んでいただいた方はまた聞きたいとコンサートにも来場していただけたと感じた。出演者のお二人の身近な雰囲気と角田市では聞く機会のとても少ない本格的なクラシックコンサートを届ける機会となった。

その一方で、多くの方にとってクラシックを聞くというハードルがまだまだ高い現状と周知・集客の工夫が必要であることを実感した。

ホール担当者の意見・評価
浅野　広平（角田市教育委員会生涯学習課）

①　応募の動機・事業のねらい

角田市では普段聴くことができない本格的なクラシック音楽を提供すること、身近なホールとしてかくだ田園ホール事業に対する市民の興味関心を高めること。

②　企画のポイント

クラシック音楽への興味関心を高めること、またクラシック音楽のハードルを下げることを意識し、出演者にご協力いただきアクティビティ・コンサートの中で気取らない雰囲気作りをしていただいたこと。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

アクティビティという企画構成に不慣れであったため、ホール以外の場でのコンサートの準備に苦労したこと。

アクティビティで満足し、コンサートへ足を運んでいただけないのではないかということ。

④　上記③をどのようにクリアしたか

おんかつスタッフの皆さんにご協力いただき、アクティビティの構成・工夫をアドバイスいただき、アクティビティにてホールコンサートで装飾するメッセージカードを制作する等の工夫を行った。

⑤　事業を実施しての成果

アクティビティを通して、普段ホールへ足を運びづらい方々にまで本格的なクラシックを聞いていただき、ホール事業への関心を高めることができたこと。

ホール事業担当として、企画構成にあたり、出演者本人とおんかつスタッフと相談・アドバイスをいただきながらの事業を経験し、事業を実施する上での工夫を学ぶことができたこと。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

ホールコンサートへの関心を高めるため、アクティビティでの工夫を行ったが、普段、ホールへ足を運ぶ来場者が多かったため、ホール事業に関心のない市民へ届けることができなかったと感じた。

今回の事業の成果や実際に来場した方の感想・反応をまだホールへ足を運んでいない層へ届けていかなければならないと感じた。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

本事業を通して、アクティビティ・コンサート事業に不慣れな私たちホールスタッフにとって、開催する上でのアドバイスをいただきながら事業を進めていくことでとても貴重な経験をいただきました。

また、参加した皆さんからの予想以上の反響を受け、ホール事業に関心を持っていない層への周知がこれからのかくだ田園ホールの課題であることを気づかされました。

今回、得ることのできた経験をホール事業の継続・発展に生かし、クラシック・ホール事業により関心をもっていただけることを目標にしていこうと考えます。

アシスタントレポート
山路　順子（公益財団法人立川市地域文化振興財団 文化事業係）

角田市は、仙台駅から南方に電車で約１時間、宮城県の「仙南」と呼ばれる地域。東西は山地、市内の南から北に向けて一級河川の阿武隈川が流れ、秋には黄金色の田園風景が広がる自然豊かな市です。国指定重要文化財の高蔵寺阿弥陀堂などの貴重な歴史資源のほか、日本のロケットエンジンの研究開発を行なっているJAXA（宇宙航空研究開発機構）角田宇宙センター、多彩なスポーツ・レクリエーション施設が立地する「かくだスポーツビレッジ」など、個性豊かな地域資源が存在しています。コンサートを実施した「かくだ田園ホール」は角田市市民センター内にあり、併設の研修棟には、会議室や和室、調理実習室などがあり「芸術文化創造の拠点」として広く市民に活用されるよう建てられました。2015年オープンと比較的新しく、また奏者も納得するほど音響が美しいホールでもあります。

ご担当された浅野さんは、もともとクラシック鑑賞をはじめ観劇する習慣は無かったそうです。異動して２年目で業務も慣れない状況だったにも関わらず、ホール事業に携わることで徐々にその良さを実感していると前向きに語っていました。出演アーティストはソプラノの竹多倫子さん。４月の全体研修会におけるプレゼンテーションやアーティストとの交流を経て、演奏はもちろんのことエネルギッシュかつ明るくコミュニケーションを図ってくれた竹多さんに心惹かれ、お願いすることとなりました。

＜課題とコンセプト＞

今回課題として挙がったのは、オープンして比較的新しく認知度がまだ低いこと、ホール事業のために足を踏み入れたことが無い市民が多いこと、更にはクラシック公演ともなると敷居が高いと思われることでした。ホールの認知度を上げて応援される存在になるにはどの様なアプローチを行うのか。恐らく殆どのホールが抱えているシンプルかつ大きく長期的な悩みでした。今回のおんかつとしては、実施時期がクリスマスシーズンであったことから、コンサートの副題は「～至福のクリスマス かくだ田園ホールからあなたへ～」と、音楽を贈り物に例え、お友達や家族などを誘い合い複数名でコンサートにお越しいただけるようなコンセプトを設定しました。

＜アクティビティとコンサート＞

アクティビティ訪問先は先頁の通り、３カ所は活発に日々活動している高齢者を対象に、イタリア歌曲やオペラアリアなどのクラシック音楽に加え、事前に要望のあった「日本唱歌メドレー」を取り上げていただきました。それぞれの懐かしい世界へ誘い、涙を浮かべる方も多く見られました。そのほか、音楽にどのような感情が潜んでいるか耳を澄ませて聴く「喜怒哀楽（コーナー）」、音楽に合わせてユニークな振り付けと手拍子を交えて体を動かすコーナーなど、関心を引きつけ続けるバラエティに富んだプログラミングで会場を盛り上げました。小学１年生～３年生を対象にした児童センターでは、ピアニストの辻田祐希さんと二人で猫に変身してストーリー仕立てに「猫の二重唱」を披露。杖を頼りにしていたおばあちゃんが鑑賞後杖を忘れたことや、鑑賞後「ピアノリサイタルを開催する」と自慢気に話した男の子が物語っているように、どのアクティビティも竹多さんの豊かな表現と進行や問いかけに対して、瞬く間に笑顔の絶えない会場となり、マスク越しでも十分に解るほど元気いっぱいのリアクションで溢れました。

コンサートの前半は、アクティビティで実施したバラエティに富んだものを、前半最後の「クリスマスメドレー」では来場者へサンタの帽子とサイリウムが配られ、光と音のコラボレーションを行いました。後半はオペラ歌手の聴かせどころを、これまでの集大成と言わんばかりに見事な歌い上げで幕を閉じました。ホールロビーでは展示企画「メッセージカードでツリーを彩ろう」を実施。チケット購入時に渡したカードに想い想いのメッセージを書いて来てもらい、七夕の短冊のようにツリーへ飾りつけを

行うものです（結果、各アクティビティ参加者にも書いていただきました）。

話は戻りますが、現地入りした初日、竹多さんのご希望もありランスルーを実施しました。対象者に伝わりやすい進行になっているかなど、浅野さんを交えて確認や意見交換を行い、この最初の共同作業がトリガーとなり、全体像も見えてきて士気が高まりながら翌日よりアクティビティが始動。何度も振り返りを行い、細かい反省点も次回に繋げていただきました。２回目のアクティビティでは、ほんの数時間でブラッシュアップされた竹多さんの並々ならぬ向上心を目の当たりにして、最終的には職員やスタッフの皆さんも総出で、思いやりを持って最大限行動へ移し続けていくかけがえのない時間が生まれていました。

＜最後に＞

今回強く感じたのは、コンサートやアクティビティ中に、アーティストとの垣根が無く空間が一体になれたことです。アーティストも鑑賞側も、どちらか片方だけでも一定の距離を取ってしまうと緊張感や身近さが失われてしまうことが多々あります。これは来場者に限らず、おんかつに協力してくださった全ての皆さんが心からアーティストを熱く歓迎していたことも大きな理由だと感じます。竹多さんや辻田さんも全力で音楽の楽しさを届けてくださり、相思相愛のもと、音楽もアーティストも理想の「身近さ」が達成されたと考えます。そして、このおんかつでかくだ田園ホールを応援したいと思った方も少なくないはずです。

今後も変わらぬ情熱と更なる高みを目指して、沢山の方に愛され続けるホールとなるよう願っております。改めて関わった全ての皆様へ感謝申し上げます。

実施団体：茨城県牛久市
実施時期：令和５年２月24日（金）～令和５年２月26日（日）
出演アーティスト：新野将之（打楽器）　齋藤綾乃（打楽器）

アクティビティ

タイトル：ぼくたちわたしたちとパーカッション奏者と！
期　　日：令和５年２月24日(金)　10：30 ～ 11：15
会　　場：牛久市立第一幼稚園　幼稚園内ホール
参 加 者：園児31名　保護者４名

「ミッキーマウスマーチ」を最初に演奏すると、園児たちの笑顔･手拍子による大きな反応があり､「マンボのビート」でのボディパーカッションでは、園児たちが夢中になって手・足・体全体を使って参加する等､とても活気のあるアクティビティとなった。新野氏･齋藤氏の園児たちへの話しかけもすばらしく、会場にひな人形があった事から当初演奏予定のなかった「ひなまつり」の演奏も行い、アーティストの対応力の高さを感じた。

タイトル：フラダンスとパーカッションの融合
期　　日：令和５年２月24日（金）　15：00 ～ 16：00
会　　場：エスカード生涯学習センター　エスカードスタジオ
参 加 者：フラハイビスカス牛久　会員８名

ジェンベによる「トゥー・ザ・ゴッズ・オブ・リズム」から始まる各楽器の演奏･紹介に対して、参加者から大きな反応があった。最後は練習で使用している「アロハ・ウクレレ」の、マリンバ・スティールパンによる演奏と参加者のフラダンスによるコラボレーションを行った。参加者はアクティビティの内容に満足していた他、普段聞いている曲を別の楽器で演奏する事によって新たな発見を感じたとの感想も聞かれた。

タイトル：打楽器を一緒に演奏しよう！
期　　日：令和５年２月25日（土）　11：00 ～ 11：45
会　　場：牛久市総合福祉センター　センターホール
参 加 者：牛久市知的障害者等デイサービスわくわく・放課後等デイサービスすてっぷ利用者 ８名　保護者５名

既存曲の演奏を行う他に、演奏者を中心に参加者・スタッフ全員で輪になって椅子に座り全員で即興で太鼓を演奏するドラムサークルのコラボレーションを行った。参加者の反応は様々だったが、楽しんで参加していた様に思う。その中でも特に興味を示してくれた参加者は、席から立ち上がって新野氏のところに行きリズムに合わせて一緒に踊りだす場面があり、音楽の魅力を感じる貴重な瞬間であったと思う。

タイトル：民謡とパーカッションいろいろ
期　　日：令和５年２月25日（土）　15：30 ～ 16：30
会　　場：牛久市中央生涯学習センター　音楽室
参 加 者：民謡心千会　会員17名

普段団体の活動で使用しない、スネアドラム等の打楽器紹介・演奏に対しても、参加者の大きな反応があった。曲を聴いて浮かんだイメージを答えてもらうコーナーも積極的に声が上がり、最後は牛久市の民謡「牛久ハッピー音頭」をマリンバ・ピアニカの演奏に合わせて参加者が踊るコラボレーションを行った。参加者は楽しんで参加しており、馴染みの薄い曲でも魅力を伝えられるアーティストのコミュニケーション能力の高さを感じた。

コンサート

タイトル：新野将之ファミリーコンサート ｉｎ ＵＳＨＩＫＵ
～いろんな“音”を楽しもう！パーカッションアーティストからの贈り物～
期　　日：令和５年２月26日（日）　14：00 ～ 15：15
会　　場：牛久市中央生涯学習センター　文化ホール
参 加 者：239名

１曲毎に新野氏が楽器・曲目の解説を行い、「マンボのビート」では曲に合わせて観客に体を動かしてもらった。アンコール曲「牛久ハッピー音頭」では、来場していた民謡心千会の方の合いの手が上がり、観客とコミュニケーションを取りながらのコンサートとなった。各演奏曲ごとに観客の反応があり、演奏者も楽しんで演奏できていた様に感じ、アンケートでも回答者の８割近くから「良かった/とても良かった」との評価を頂けた。

ホール担当者の意見・評価
牛久市教育委員会文化芸術課　鈴木　慶一

①　応募の動機・事業のねらい

牛久市の公共ホールを使用した文化公演のための自主事業は、令和２年度から体制改変により実施されていなかった。今回おんかつによる地域交流プログラム(アクティビティ)･公演を行う事で､公共ホールや中央生涯学習センター内の施設、中央生涯学習センターで行われている市民サークルの活動について、より多くの市民に認知してもらう為の機会としたいと考え、応募した。

②　企画のポイント

アクティビティは、当初４回とも中央生涯学習センターを会場として、講座室等施設を利用して活動している成人年齢層のグループを対象とする予定だったが、コーディネーターや課内職員と再検討した結果、中央生涯学習センター以外の場所も会場とすることとした。またコンサートをファミリー向けとした為、文化芸術活動のグループだけでなくより広い年齢層・団体も対象者にする事にし、検討の結果幼稚園１校の児童と知的障害者デイサービスの利用者にも参加を依頼して実施することとした。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

⑴　担当者のホール事業の遂行や文化ホールに関する知識が無かった為、企画内容やスケジューリング、アクティビティ・コンサートの為の準備等、あらゆる点で時間がかかってしまった。

⑵　コンサートチケット販売について、販売開始当初は枚数が伸びず、集客に苦労した。

④　上記③をどのようにクリアしたか

⑴　他の職員に相談し協力依頼を行い､作業分担を行う事で以前よりスムーズに進めることが出来た。

⑵　アクティビティ参加者と事前打合せする際にコンサート来場の依頼を行った他、コンサートチラシを追加発注して、小学校・中学校の他、市が担当している他の文化芸術事業の関係者にもへ配布依頼を行って対応した。

⑤　事業を実施しての成果

アクティビティについて、対象者は小学生/中学生等と統一せずにバラバラの世代・団体になったため、アーティストにはとても苦労をおかけしたが、それぞれの対象毎のプログラム構成をしっかり考えて頂いたので、今後自主事業として音楽ワークショップを行う場合において、各世代ごとにどの様なアプローチで実施すべきかを学べて、とても参考になった。

事業の全体的な感想としては、舞台芸術の計画・実施の流れを直に学べた事はとても良い経験になったので、同様の事業を行う場合に活かしていきたいと思う。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

企画の面について、コーディネーターからのアクティビティ・コンサートに対するアドバイスをほぼそのまま利用する形となってしまい､担当者からアイデアが出なかった事は大きな反省点と感じている。その他に、７月のコーディネーターとの打ち合わせで、アクティビティの実施場所やコンサート対象者について検討する様に話が出た際、４月研修時に企画書を作成した際の担当コーディネーターからのアドバイスと少なからず違いがあったので、戸惑いがあった。コーディネーター同士で企画内容の引継をされていないのであれば、実施していただきたいと思う。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

クラシックのコンサートである事、楽器も打楽器というメジャーではないジャンルである事から、集客について苦戦する事は予想されていたが、コンサート来場者のアンケート回答率は60%近くと高く、回答者も80%近くが高い満足度を示していた為、内容についてはやり方次第で市民に十分満足してもらえるという事を感じた。今後、より多くの市民にホールへ足を運んでもらえる様にする為には、ホールのイベント情報に市民がアクセスしやすい様に、広報やチケット販売の方法を検討する必要があるのではないかと考えている。

アシスタントレポート
佐野　秀典（作編曲家、公益財団法人東京都交響楽団ほか）

牛久市は、茨城県の南部にある人口８万５千人の市である。東京まで常磐線で１時間ほど、また筑波研究学園都市も近いベットタウンでもあり、日本初の本格的ワイン醸造場の牛久シャトーや高さ120mと迫力満点の牛久大仏などの名所がある。

今回は牛久市中央生涯学習センター・文化ホールの認知を高めたいというテーマのもとアクティビティとコンサートが繰り広げられた。生涯学習センターは様々な部屋が設置され多くの市民団体が活動をしており、大変賑やかな印象を受けた。おんかつ期間中はひな祭りのイベントも開催され賑わっていた。文化ホールは1,198名の定員でオーケストラや吹奏楽も活動できる優れた音響の大ホールで、こちらもいろいろな活動やイベントが行われておりしっかりと稼働している印象を受けた。

アーティストは、牛久市の担当の鈴木さんが演奏（しかも、クセナキスの難曲「ルボン　b」が凄かったという！）を聴き、是非この人にお願いしたいと思った打楽器の新野将之さん、共演者には同じく打楽器奏者の齋藤綾乃さんのお二人。おんかつも３年目、また他でも一緒に活動をしているだけありとても息のあった２人でハードな４日間を走り抜けた。

アクティビティは、舞台上にあった雛人形から「ひなまつり」を演奏し、園児の参加曲では一生懸命手元の楽器を操る姿が印象に残った牛久市立第一幼稚園。普段近くでは接しない音楽に対して熱心に耳を傾け打楽器を使った演奏でフラダンスを共演した際はとても表情豊かに時間を過ごしていたエスカード生涯学習センターでのフラダンスサークル。本プログラムのアンコールで演奏した牛久ハッピー音頭の作者と一緒に歌い踊り交流を深めた中央生涯学習センターでの民謡サークル。そして、総合福祉センターでの知的障害者を対象とした、参加者も一緒に太鼓を演奏する参加型のプログラムで、最初はとまどっていた参加者もだんだん周りの空気に飲み込まれ、参加者２名が中央に立ち指揮を振ってその場の音楽を楽しんでいた姿はとても印象的であった。４回とも対象が異なりアーティストにとっては大変だったとは思うが、基本的には同じ内容流れの中で行われていた。大変よくできたプログラムではあったが、根本にあるテーマ、打楽器の紹介、そしてその中に一緒に参加して演奏する曲や、イメージに関する曲などと要素を盛り沢山に込んで取り入れているため、一期一会、一度きりしかない機会と考えれば良いのかもしれないが、テーマを絞り参加型プログラムで最後を締める、そこへ向かうような流れの設計をしても良いのではないかと強く感じた。

コンサートは、家族で一緒に来ることなどを考えファミリー層をターゲットにし４歳以上が入場可能となるコンサートとした。トークを交えながら70分間のプログラムは、アクティビティ同様に楽器紹介の流れが根本にあり、５分程度の曲が散りばめられた、体力を要するチャレンジングなプログラムとなった。新野さんは、一人でなんでも出来てしまう、いや、というより全てやってしまう方ではあるので素晴らしいのだが、常に全力疾走なので、時には少し間を置く時間、話を少しリラックスさせた方向に持っていく内容にしたり、時には共演者にお任せすることもあったりするので良いのではないか。とても難しいことではあるのだが、緩急の付け方を学んで、この先より良いプログラムを作っていって欲しいと思う。

昨今は、劇場・ホールも直営、指定管理者による財団運営、民間運営などと多様化しそれぞれの利点欠点がある中で、地域のために活動している。今回の牛久市は直営で担当の鈴木さんは、今年度から配属され右も左も分からないまま音楽分野と美術分野などの担当を持つという大変な状況の中、素晴らしく完走されたが様々困難な点もあったと見受けられた。その他財団運営で方針があるところでは、方向性にそぐわないことや、民間運営の組織などでも同様のことや予算などの制限もあるだろう。だが我々の対応やシステムも全部同じではなく、それぞれに寄り添っていかないとならないのではないか。そこに寄り添えないのに、地域に寄り添うことが可能であろうか。

またアーティストにアクティビティの内容を求めすぎてはいないだろうか？１時間、ましてや45分で全ての要素を詰め込むことはできない。だからこそ、何か明確なテーマを持ってそれを軸にして行うことが必要ではないだろうか。芸術的思考が強いアーティストが自己表現の追求の中で、どのように地域に寄り添ったものを作っていくかを考案していかなければならない。アマチュアではなく、アートコミュニケーターではなく、プロフェッショナルのアーティスト、そしてその人と音楽が持つ力を地域に役立て、地域参加の意義と芸術性の追求を両立したプログラムをそれぞれに合った形で作っていって欲しいと思う。

おんかつだから、地域創造だからこそできることがたくさんある。多くの素敵なアーティストが、多くの魅力ある地域と関わる中で、より良いものを作り上げ笑顔あるまちづくりを行うことを願う。そして牛久市が、さらに魅力ある地域になることを心より期待したい。

実施団体：木更津市
実施時期：令和５年２月２日（木）～令和５年２月４日（土）
出演アーティスト：新野　将之（打楽器）　富田　真以子（打楽器）

アクティビティ

タイトル：新野将之パーカッションコンサート
期　　日：令和５年２月２日　10：30～11：15
会　　場：鎌足小学校　多目的室
参 加 者：１・２年生　22名

元気な児童が多く、三択クイズや曲名を考えるコーナーは大盛況だった。新野さんが児童の目線に合わせたアプローチ方法を模索してくださり、距離が縮まるのが早かった。自由な発想に大人が驚かされる場面が多々あり、席から立ち上がって自分の考えた曲名を見せている児童が多数いた。その様子を見て「音楽に正解はない、自分の感じたことを大切にする」というメッセージが伝わったのではないかと感じた。

タイトル：新野将之パーカッションコンサート
期　　日：令和５年２月２日　14：25～15：10
会　　場：富来田小学校　音楽室
参 加 者：４年生　28名

新野さんの迫力ある登場に、初めは緊張していたのか反応が薄かったが、新野さんが親しみやすく、和やかな雰囲気を作ってくださり、緊張がほぐれてアクティビティが進むにつれて発言が多くなってきた。「子どもたちにより身近に感じてもらいたい」という新野さんの想いから富来田小学校のタンブリンを使って演奏した場面があった。プロが演奏すると「こんなに音が違うのか！」と驚いている様子であった。

タイトル：新野将之パーカッションコンサート
期　　日：令和５年２月３日　10：30～11：15
会　　場：中郷小学校　体育館
参 加 者：１～３年生　47名

中郷小学校では、体育館２階のギャラリーから登場し、新野さんの表情豊かな様子を見て子どもたちは自然と笑顔になっていて和やかな雰囲気であった。

カスタネットやトライアングルが登場すると「知っている！」と元気な声があがっていた。演奏中は集中して聞いており、足や頭でリズムをとっている児童が多くいたのが印象的であった。曲名を考えるコーナーと感想を述べる場面では、発表者が続出するなど、児童の反応が良かった。

タイトル：新野将之パーカッションコンサート
期　　日：令和５年２月３日　13：25 ～ 14：10
会　　場：東清小学校　体育館
参 加 者：３～５年生　34名

控え目な児童が多く、発表は少なかったが、近くの友達やアーティストに考えた曲名を見せて盛り上がっていた。アクティビティの回を重ねるごとに、新野さんが伝え方を試行錯誤してくださっているのが分かり、控え目だった児童も打ち解けて発言が多くなってきた。５年生は､首を伸ばして新野さんの足の動きまで見ていた。お喋りしていた児童も、演奏が始まると集中して聞いており、足でリズムをとっていたのが印象的であった。

コンサート

タイトル：ぽこぽことんとん、みんなで奏でよう！
　　３才からの新野将之パーカッションコンサートin木更津
期　　日：令和５年２月４日　11：00 ～ 12：00
会　　場：木更津市民会館　中ホール
参 加 者：149名

未就学児とその保護者を主な対象者とした。

手作り楽器での演奏やボディーパーカッション体験など参加型のプログラムもあり、大人も子ども楽しめる内容であった。アーティストのＭＣや演奏に対して、笑い声や感嘆の声があがり明るく和やかな雰囲気のコンサートとなった。

アンケートには「子どもだけでなく大人も楽しめた」「子連れでプロの演奏に触れられる機会が貴重だった」など大変好評であった。

ホール担当者の意見・評価
木更津市教育委員会　教育部文化課　矢野　茜

①　応募の動機・事業のねらい

本市は毎年市民向けコンサートを実施しているが、参加者は高齢者中心で、若年層の芸術文化活動への参加が一つの課題であった。

アクティビティを小学校で実施することで、早い段階で芸術文化に触れるきっかけを作り、次世代の鑑賞者やホールの担い手の創出につなげることを事業のねらいとして企画した。

②　企画のポイント

「音楽に正解はない」「自分の考えを大切にする」「違いを楽しむ」ということを子どもたちに感じてもらうことを軸に置いた。

コンサートでは、来場者も一緒に参加できるような内容を組み込み、子連れでも安心してホールへ立ち寄れる雰囲気を作ることを目指した。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

・アーティストにどれくらい要望していいのか、どこまで任せてよいのか判断が難しかった。
・内容によって窓口が違ったので、疑問に思ったことをまず誰に確認したらよいのか迷った。
・初めての事業であったため、アクティビティ先の選出、先生方への説明に苦労した。

④　上記③をどのようにクリアしたか

・疑問や不安に思ったことは適宜共有するようにした。コーディネーターの山本さんをはじめ、桜井さん、永田さんから助言をいただき、問題を解決しながら進めることができた。
・学校教育課の先生に相談し、事前にアクティビティ先に話をしてもらったことにより説明がスムーズに進み、アクティビティ先の先生方も協力的であった。

⑤　事業を実施しての成果

対象を絞ったコンサートを実施したことがなかったため、初めは不安に思ったが、「広く呼び込もうとすると目的がぼやけてしまう」と山本さんが言っていたように、来場してほしい層を取り込むためには、今回のように対象を狭めて徐々にアプローチをかけることが有効的であると実感した。また、狙った客層が集まったからこそ、子どもが喋っても動き回ってもコンサートが成立したように感じた。当日は、アクティビティで訪問した学校の先生や児童が家族で来場する様子も見られ、クラシック音楽の魅力が伝わり、ホールへ足を運んでもらうきかっけになったことは大きな成果だった。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

未就学児が多く参加していたため「正午終わりだと、子どもが空腹で集中力が切れてしまう」等のご意見があった。今後、子ども向けの公演を実施する際は、終演時間のことも考え、プログラムを検討したい。

意思疎通がうまくいかず、アーティストとの情報共有に齟齬が生じる場面が少々あった。タイトなスケジュールの中なので焦らないよう早い段階から企画や内容を検討し、随時情報共有していくことが大切だと思った。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

対象を絞った子ども向けのコンサートを実施したことがなかったが、今回の事業を通して、未就学児が入場できるコンサートが成立するのだと新しい可能性が見えた。

「未就学児が参加できるコンサートが貴重」「子どもと一緒にまた行きたい」などの感想が多数寄せられ、ニーズがあることが分かり、また、参加した保護者同士が交流する場面が見受けられるなど、芸術文化とホール活用による地域コミュニティ形成の可能性も感じた。次世代のホールの担い手や鑑賞者を育むために、今後も若年層向け、子ども向けの事業を検討したい。

アシスタントレポート
桜井　しおり（ワークショップ・アーティストおとみっく共同代表、東京文化会館ワークショップ・リーダー）

《はじめに》

数年前からTikTokやInstagramなどのSNS上で世の中の流行を作っていく人たちのことを「インフルエンサー」と呼ぶようになったが、元々の意味は周囲に影響を与える人のことを指す。今回の木更津市の担当者、矢野さんは間違いなくチーム全体に大きな影響を及ぼし、本事業を幸せな結末へと導いたインフルエンサーであった。詳しくは後述するが、木更津市にとっても新しい風を吹き込むことができたのではないだろうか。

房総半島の西部に位置し、東京湾に面している木更津市。神奈川県川崎市から木更津市までを結ぶ高速道路「東京湾アクアライン」は、1997年に開通し、房総半島と川崎を結ぶ玄関口として、千葉県の一中核都市として発展を続けてきた。今回の舞台となる木更津市民会館は、大・中・小ホールや会議室、展示場等を備えた文化施設であり、昭和45年から木更津市の発展と共に市民の生活に寄り添ってきた場所である。アーティストは、打楽器奏者の新野将之さん。共演者は富田真以子さん。共に本事業で共演を重ねてきた経験値豊かなアーティスト達であった。

《アクティビティ》

アクティビティ先は、４ケ所全て小学校に絞ったが、学年は１年生から６年生まで幅広い対象者への実施となった。新野さんのプログラムは非常に緻密に計算されており、多様な打楽器の紹介を導入とし、マリンバを使って鍵盤楽器の魅力を伝え、さらに音楽からのイマネジネーションを膨らませるような伏線をいくつもMCに貼っており、45分間のプログラムが一瞬のように感じられた。驚いたのは最後の曲に“ルボン”（打楽器奏者が卒業試験やリサイタルで演奏するような曲）を選曲していたことだ。相手が子どもであろうが大人であろうが伝えたいものは変わらないので、と仰っていたのだが、その対象者へのリスペクトは演奏のみならず、彼のMCからも感じとれた。同じプログラムでも言葉遣いを変え、反応を見て臨機応変に対応する、しかし伝えたい軸は決してブレない。だから時間をオーバーすることも点と点がつながらない事も起こらず、誰が聴いても見ても納得できる、非常に完成度の高いプログラムだった。各小学校に新野さんのファンをつくるような、アーティストの魅力もたっぷり伝わったと思う。

《コンサート》

対象者、つまりコンサートのターゲットをどの層にするのか。担当者の矢野さんはここを非常に悩まれていた。事前下見に伺った際は、子供から高齢者まで幅広い世代へ、ということでお考えだったが、最終的に未就学児の子育て世代に絞ることになり、３歳からのファミリー層へ向けた約１時間のコンサートを開催することとなった。さらにコンサート開演前には楽器作りのワークショップを開催し、出来上がった創作打楽器をお客さんと一緒にコンサート内で演奏するコーナーも盛り込まれた。当日のコンサートでは子ども達が楽しそうに演奏している様子を拝見出来た。

新野さんのプログラムは、アウトリーチのプログラムをもとに、自作のミュージックシアター、ご当地キャラとのコラボレーション等、非常にバラエティに富んでおり、対象の子どもだけではなく、保護者たちも楽しんでいた事がアンケートからも窺えた。

《終わりに》

今回、対象者を子ども向けに絞る事に対しても、実は課内で様々な意見があったと伺った。しかし担当者の矢野さんは、対象者にコミットした内容のコンサートを創りたいという信念を譲らなかったそうだ。創作打楽器の材料収集、各パーツ作りも想像を絶する大変さだったと思うが、アーティストも子ど

も達も全員に楽しんでもらいたい。という矢野さんの熱意が、矢野さんの上司、アーティスト、我々スタッフにゆっくりと広がっていき、矢野さんがそこまでやるなら…と全員の心を動かしてきた。結果、お客様もアーティストも全員が楽しめる公演を創作し、幸せな気持ちで本事業の幕を閉じることが出来た。冒頭にも記したが、矢野さんはこの事業のインフルエンサーであり、矢野さんの熱意があっての事業だったと思う。改めて事業への向き合い方を学んだ機会となった。

実施団体：成田市
実施時期：令和４年12月１日（木）～令和４年12月３日（土）
出演アーティスト：新野　将之（打楽器）　藤澤　仁奈（打楽器）

アクティビティ

タイトル：パーカッションコンサート～一緒に音楽を楽しもう！～
期　　日：令和４年12月１日　10：35 ～ 11：20（３時間目）
会　　場：成田市立成田小学校　アリーナ会議室
参 加 者：６年生　31名

成田小学校６年１組を対象に実施しました。３択クイズや演奏を聴いて曲のタイトルを考えるコーナーなど、参加型のプログラムとなり、ただ演奏を聴くだけではなく子供たちが楽しみやすい内容となりました。

中でも、実際に触れたことのあるタンバリンやカスタネット、トライアングルなどの身近な楽器の演奏に対しての反応が大きく、驚いている様子でした。

非常に活気のあるクラスでしたが、集中する部分と盛り上がる部分のメリハリがきちんとしていて、真剣に取り組んでくれている様子が印象的でした。

タイトル：パーカッションコンサート～一緒に音楽を楽しもう！～
期　　日：令和４年12月１日　13：00 ～ 13：45（５時間目）
会　　場：成田市立成田小学校　アリーナ会議室
参 加 者：特別支援学級　10名

成田小学校たけのこ学級を対象に実施しました。基本的には１回目と同内容のプログラムでしたが、特別支援学級の子供たちを対象としたため、登場の際に驚かせてしまわないよう工夫していただきました。

曲のタイトルを考えるコーナーでは、曲を聴いて連想した色やイメージなどを発表してもらい、その他の演奏についても最後まで集中して楽しんでいる様子でした。

タイトル：パーカッションコンサート～一緒に音楽を楽しもう！～
期　　日：令和４年12月２日　11：20 ～ 12：05（４時間目）
会　　場：成田市立成田小学校　アリーナ会議室
参 加 者：６年生　32名

成田小学校６年３組を対象に同内容で実施しました。１回目と同様に、身近な楽器をプロが演奏した場合の音や演奏方法の違いに驚いている様子でした。

なかなか曲名が思い浮かばない子もいましたが、アイデアが出るまで繰り返し演奏するなど、臨機応変に対応いただきました。

みんなでアイデアをシェアした後も、集中力が切れることなく最後まで熱心に演奏に耳を傾けていました。

タイトル：パーカッションコンサート～一緒に音楽を楽しもう！～
期　　日：令和４年12月２日　13：35 ～ 14：20（５時間目）
会　　場：成田市立成田小学校　アリーナ会議室
参 加 者：６年生　33名

成田小学校６年２組を対象に同内容で実施しました。積極的な児童が多く、アーティストからの声掛けに対する反応や演奏後のリアクションが非常に良かったです。

途中騒がしくなってしまう場面もありましたが、演奏がはじまると、集中して取り組んでおり、大変盛り上がったアクティビティとなりました。

コンサート

タイトル：０さいからのパーカッションコンサート～にいのまさゆきがお届けする家族で楽しめるクラシック～
期　　日：令和４年12月３日　11：00 ～ 12：00
会　　場：成田市文化芸術センター　スカイタウンホール
参 加 者：118名（大人：64名　高校生以下：13名　未就学児：41名）

未就学児向けのコンサートだったため、休憩なしの60分間のプログラムで実施しました。コンサートの前には、コンサート中に使用するかえるの楽器のワークショップを開催し、11名のお子さんに参加いただきました。

コンサートは１曲目の曲調に合わせ、照明をジャングル仕様にしたことで世界観に引き込むことができました。

手作り楽器をコンサート中に子供たちと一緒に演奏したり、市観光キャラクターのうなりくんと共演いただき、ボディパーカッションのコーナーを設けていただくなど参加型のコンサートとなり、小さいお子さんを始め保護者の方にも楽しんでいただける内容のコンサートになりました。

ホール担当者の意見・評価
成田市シティプロモーション部文化国際課　齋藤　栞里

①　応募の動機・事業のねらい

まだ本格的なクラシックやプロの演奏を体験したことのない小学生や小さい子供を対象に、芸術への興味を持つきっかけを提供することで、音楽を身近に感じてもらい、ホールの活性化につなげたいと思い応募しました。

②　企画のポイント

子供たちにプロの音楽を間近で体感してもらうこと、音楽の楽しさを実感してもらうことをポイントとしました。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

応募の段階では、アウトリーチではなくホールに足を運んでもらった方を対象としたアクティビティを考えていたため、アクティビティ先の選定に苦労しました。

④　上記③をどのようにクリアしたか

小学生を対象としたアウトリーチが初めてだったため、校長会・教頭会で事業概要や趣旨を説明し、実施希望校を募りました。

数校希望いただいた中から、楽器の搬入等様々な状況を鑑みて実施校を選定いたしました。アクティビティを全て同じ場所で実施することができたため､移動等含めスムーズに運営することができました。

⑤　事業を実施しての成果

アクティビティでは、楽器の紹介や演奏に熱心に耳を傾けており、音楽に興味をもつきっかけ作りができたのではないかと実感しております。また、音楽への関心を喚起するだけでなく、多様性や違いを認め合うといったメッセージも込めていただき大変実りある内容となりました。

コンサートでは、小さなお子さん用にじゅうたん席を設けましたが、そちらもリラックスできるとのことで好評でした。コンサート中の撮影を可としたことで、お子さんがアーティストやうなりくんと一緒にボディパーカッションをしている様子を動画で撮影したりと保護者の方にも満足のいくコンサートになったのではないかと感じております。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

アクティビティ先を１か所としたことで、スムーズに事業の実施ができましたが、今後アウトリーチ事業を展開していくにあたり、複数の小学校の先生方に事業の様子を見ていただくのが良かったのではないかと感じました。

また、アクティビティとコンサートの対象年齢に少しズレが生じており、アクティビティに参加した子供たちがコンサートにも訪れるといった流れを上手く作ることができませんでした。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

通常の自主事業の場合、高齢の方が来場者の大半を占めているため、今回未就学児向けのコンサートということで、広報の方法等を改めて考えなおすきっかけになりました。

クラシック公演やジャズ公演等様々なジャンルの自主事業を行っておりますが、幅広い世代の方にコンサートに来場いただけるよう工夫して事業を行っていきたいと思います。

アシスタントレポート
松井　真理子（神奈川芸術劇場 KAAT EXHIBITION コーディネーター）

《はじめに》

成田市は千葉県北部中央に位置する人口13万人の中核市である。日本の空の玄関口である成田国際空港を擁するとともに、全国屈指の参拝者数を誇る成田山新勝寺の門前町として発展し、現在は国際観光都市として国内外から多くの来訪者を迎えている。新型コロナウイルスの影響により足が遠のいた観光客も戻りつつある状況の中での事業実施となった。

今回の公共ホール音楽活性化事業の舞台となったのは、成田市の中心地である、JR成田駅に隣接する「スカイタウン成田」ビルの３Ｆから５Ｆにある「なごみの米屋スカイタウンホール（成田市文化芸術センター）」である。成田市文化芸術センターは文化芸術の振興及び市民の文化芸術活動の発展に寄与し、にぎわいを創出するため、音楽、美術、演劇、舞踊等の鑑賞及び実践の場並びに人々の集う場として2015年にオープンした。301席の多目的ホールを中心にギャラリー、会議室、音楽室があり、市民の文化活動の発表から、講演会、地元企業の研修など、幅広く利用されている。運営は市による直営にて行われており、成田市シティプロモーション部文化国際課が担当している。なお、名称である「なごみの米屋」は、門前町に総本店がある和菓子メーカーである米屋株式会社がネーミングライツ・パートナーとなっている。

スカイタウンホールのスタッフであり、文化国際課の齋藤栞里さんが担当し、アーティストは打楽器を通して音楽の楽しさと可能性を伝え続けている打楽器奏者の新野将之さん、共演者は打楽器奏者の藤澤仁奈さんである。

《アクティビティ》

今回の音楽活性化事業は、本格的なクラシック音楽に触れたことのない子どもたちに音楽を身近に感じてもらい、文化芸術への興味・関心を喚起することを目的として実施された。アクティビティは成田市立成田小学校の６年生（１組～３組）と特別支援学級を対象に行われた。成田市ではアクティビティのようなアウトリーチ型事業は初めてということで、慣れない中で慎重に、また、楽器の搬出入も考慮して同じ小学校内で４回開催されたが、他の会場や対象のアクティビティを試しても良かったのかもしれないと感じた。しかし、担当の先生としっかりと関係性を築きながら集中して取り組め、さらに教育委員会や他校の先生が見学に来るなど、市の事業としてアクティビティの存在と意義を周知することができた。

新野さんと藤澤さんの呼びかけに児童たちが元気よく答え、活発な相互交流が生まれる賑やかなアクティビティとなった。音楽室にある身近なトライアングルやタンバリンがプロの演奏者の手によって全く違う音色を出すこと、様々な打楽器や演奏法があること、打楽器の楽しさを存分に感じる内容となった。そして、音楽を聴いて曲のタイトルを考えて発表しあうプログラムでは、色々なタイトルが生まれ、同じ音楽でも人によって感じ方が違うことの面白さ、音楽を通して多様性を尊重しあうことの素晴らしさを楽しみながら知ることができた。

《コンサート》

コンサートは、「０さいからのパーカッションコンサート～にいのまさゆきがお届けする家族でたのしめるクラシック～」と題し、未就学児とその保護者を対象として開催された。スカイタウンホールでは、未就学児向けコンサートを実施するのは初めてということで、新たな挑戦となった。初めての試みですぐに成果を出すのは難しい。集客に苦労したが、子育て支援施設へのチラシ配布、市の子育てサイトへの掲載などコンサート直前まで広報活動に取り組んだ齋藤さんの努力が、コンサートの集客につな

がった。この経験は、今後同様の事業を実施する際の足掛かりとなるはずである。

コンサート開演前には、親子でかえるの手作り楽器を作るワークショップを行い、楽器を持ってホールへ入場した。ワークショップに参加しなかった観客へもスタッフ手作りの楽器を配布、ステージ前には靴を脱いでくつろげるスペース、壁面にはクリスマス柄の照明と、始まる前から観客のドキドキワクワクを引き出す工夫がなされていた。新野さんのアフリカのリズムから始まり、新野さんと藤澤さんによる様々な打楽器の紹介や、打楽器の迫力を感じる曲、クリスマスの曲、さらに成田市観光キャラクター「うなりくん」も登場して会場全体で楽しんだボディパーカッションと、多彩なプログラムに子どもも大人も夢中になった。そして、新野さんオリジナルのミュージックシアター「うんぽ～こ」では、演奏と語り、照明も合わさり、感動的な物語が展開された。子育てに苦労する親世代の心にも届く内容に、日々の生活の応援にもなったことだろう。新野さんと藤澤さんはもちろん、演奏者の希望やアイデアを引き出し、素晴らしい照明や舞台進行を行ってくれた舞台スタッフの方々によって観客の思い出に残るコンサートとなった。

《さいごに》

アクティビティに、ワークショップに、コンサートにと走り回る担当の齋藤さんを見ていると、限られた人員と予算、職員の異動など、市の直営ホールを運営する日々の苦労が想像される。しかし、ホールスタッフ、舞台スタッフ、市役所職員、小学校、教育委員会、子育て施設など、関係性を築く中で協力を得ることが出来ている点に注目したい。初めての音楽活性化事業、初めてのアクティビティ、初めての未就学児コンサートと、今までとは違うことに取り組む苦労もあったと思うが、新たな取り組みを始めると新たな関係性が生まれ、今後の支援や協力、連携先へと発展していくきっかけを作ることが出来る。ぜひ、今回の音楽活性化事業で培ったものをさらに増やしていただきたいと考えている。特に駅前という立地を活かし、成田山へつながる門前町、ネーミングライツ企業やその他の地元企業との連携、行政の直営だからこその地域との連携を期待している。

実施団体：公益財団法人やまなし文化学習協会
実施時期：令和５年３月９日（水）～令和５年３月11日（土）
出演アーティスト：齊藤　一也（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：感性煌めき音楽会
期　　日：令和５年３月９日（木）　10：30 ～ 11：30
会　　場：双葉ふれあい文化館　リハーサル室
参 加 者：ソラミミ（合唱グループ）　８名

日頃から合唱で音楽に親しまれている皆さんをお招きしました。クラシックを中心に春にちなんだ童謡・唱歌の演奏と、参加された中から２名×２回齊藤さんと一緒に連弾体験も行いました。非常に刺激になり、これからの活動にも意欲が湧き、是非次もこのような機会がありましたらお声がけくださいとお喜びでした。

タイトル：ピアノを聴いてみるじゃんけ音楽会
期　　日：令和５年３月９日（木）　14：00 ～ 15：00
会　　場：敷島総合文化会館　ホール
参 加 者：いきいきサロン上町南　16名

甲斐市ボランティア活動の一環であり、地域の皆さんの憩いの場として定期的に開催している「いきいきサロン」。クラシックコンサートに赴いたことがない方や生演奏を聴く機会がない高齢の方が多く、最初は戸惑い気味でした。しかし、ピアノとの距離が近いこともあり、齊藤さんの指の動きにくぎ付けになる方やピアノの響きに圧倒される方、メモを取られている方もいらっしゃり大変興味を抱いてくださいました。

タイトル：夢を叶える音楽会
期　　日：令和５年３月10日（金）　10：00 ～ 10：45
会　　場：認定こども園 光学園
参 加 者：光学園園児（年中・年長）と保育士　64名

特に音楽教育に力を注ぐ園でアクティビティを大変喜んでくださいました。受け入れ態勢をしっかりと整えてくださり、園全体が温かい雰囲気なのが印象的でした。本番中もこどもたちがお行儀良く、興味深く聴き入り、日頃から音楽に親しんでいるのが分かりました。園児に向けて、斎藤さんもイメージ画像を見せるなど工夫を凝らしてくださいました。他のアクティビティより少し時間を短縮しましたが、園児の集中力も最後まで途切れずによかったと思います。

タイトル：ピアノに酔いしれるアフタヌーン
期　　日：令和５年３月10日（金）　14：00 ～ 15：00
会　　場：双葉ふれあい文化館　リハーサル室
参 加 者：甲斐市商工会女性部　13名

商工会にご協力をいただき、地元で事業をされいてる女性の皆様をお招きしました。日頃、優雅に音楽を聴く機会がなかったので贅沢な時間を過ごせたと喜んでくださいました。参加された方の中には何をするのかどんな音楽会なのか分かってらっしゃらない方もいらしたようですが、こんな素敵な音楽だとは思わなかったと驚いていらっしゃいました。商工会の方も次は青年部などほかの皆さんに声をかけたいのでご連絡くださいと嬉しいお言葉をいただきました。

コンサート

タイトル：「オトタビ～ 10本の指で紡ぐ名曲の数々～」
期　　日：令和５年３月11日（土）　14：00 ～ 16：00
会　　場：双葉ふれあい文化館　ホール
参 加 者：一般

前半はステージに画像を映写しながらの演奏でした。事前に一般から「ふるさと@甲斐市」の風景画像を公募し、その中から曲のイメージに合ったものを使用しました。齊藤さんご自身がヨーロッパに滞在していた時の画像も交えました。前半の最後には3/11ということもあり「ショパン：ノクターンハ嬰ハ短調 遺作」演奏し、後半では映像無しでベートーヴェンなどの曲を存分にお届けしました。齊藤さんを慕う地元の方々やお知り合いが多くご来場くださり各席の半数以上が埋まりました。

ホール担当者の意見・評価
双葉ふれあい文化館　深見　幸子

①　応募の動機・事業のねらい

地域での文化芸術の裾野を広めるため、市内の様々な施設や事業所、小中学校などと連携し、質の高い文化芸術を身近に鑑賞する機会を提供するとともに、地域が一体となって、年齢、障害の有無、経済的な状況又は居住する地域にかかわらず等しく文化芸術の機会を享受する「社会包摂」の理念に合致する事業のため、応募いたしました。

②　企画のポイント

日頃当館に来場する機会の少ない市内の障害者施設や高齢者施設等の様々な事業所や、未来の地域文化を担う児童・生徒の文化創造の熱意発揚を目的に小中学校において開催することにより、地域文化の活性化と向上を図る

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

①開催時期が３月に決定し、当初アクティビティ対象であった小中学校は卒業式シーズンと重なるため別の団体を再検討することになりました。
②コンサートチケットの販売促進
③コンサート内で投影する画像（「ふるさと@甲斐市」と題し、甲斐市の風景画像）を募集しましたが、数枚しか集まりませんでした。
④職員３名という少数で動けるのか不安がありました。

④　上記③をどのようにクリアしたか

①アクティビティ先を小中学校から地元こども園に切り替えました。
②テレビCMスポットに齊藤一也さんのメッセージ動画を挿入したところ反響がありました。
③画像はＳＮＳで募集をし、分かりやすい内容で再周知したところ〆切間際で集まりました。
④同じ協会の職員１名が研修会に参加、その後、印刷物の作成、アクティビティの協力をお願いしました。

⑤　事業を実施しての成果

生演奏で本格的なクラシックを聴く機会が無い方々に興味を持ってもらえるか不安がありました。じっと座って聴いてくださるのか、皆さんの表情をうかがっていました。しかし、アクティビティ・本番のコンサートでも皆さん引き込まれていらっしゃいました。年齢など関係なく同じ表情で、時にうっとりし、手を叩き、感嘆の声をあげ、その時間を楽しんでくださいました。どのグループの皆さんも次回も是非お声がけくださいとおっしゃってくださり手ごたえを感じました。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

今回は齊藤さんが地元ご出身の方だったので、ご親戚、お知り合いの方々のお声がけでコンサートには多くの方がご来場されました。出演者が地元の方でなければこんなにも多くの来場者はいらっしゃらなかったと思います。今後、地元ご出身でない方をお招きした場合、チケットの販売に苦心するのが予想されるのでそこをどうクリアしていくかが課題となります。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

甲斐市は移住者が増え、徐々に市街地化しているとはいえ、自らが文化芸術に親しむために行動するには消極的な土地柄でもあります。しかし、アクティビティに参加された皆さん、公演にお越しくださった皆さんの表情やご感想を見て、この街に住む人々の感性はなんと豊かなことか。行動制限も緩和されたこの時期も絶好のタイミングでした。地域の皆さんに心のゆとりと、ときめきと、刺激を与えるお手伝いが少なからずできたと感じます。今回の事業で経験したことを踏まえ、これからも閃きを具現化しながらホールの可能性を探っていきたいと思います。

アシスタントレポート
三浦　幸恵（公益財団法人 東京都歴史文化財団 東京芸術劇場 音楽制作担当）

甲斐市は、山梨県北西部に位置する都市で、2004年に竜王町・敷島町・双葉町の三町が合併し誕生した。人口は７万６千人と県内では甲府市に次ぐ人口第２位の都市である。ひときわ大きく見える富士山だけでなく甲斐駒ヶ岳、北岳、南アルプスの山々の景色が望め、豊かな自然に囲まれた地域である。歴史をたどると、武田信玄によって築かれた堤防「信玄堤」も甲斐市（旧竜王町）にあり、武田信玄ゆかりも地も多くあるようだ。

さて、今回の舞台となった甲斐市双葉ふれあい文化館は、旧双葉町に位置し、館内には客席数506席のホールとリハーサル室があり、図書館が隣接されている。ホールは、500席ほどのキャパシティがあると思えないほど、舞台・客席とが親密で居心地の良いホールという印象だった。

担当されたのは、双葉ふれあい文化館で事業担当を務める深見さんと山梨県生涯学習推進センターの楠さんのおふたり。深見さんは数年前に同じく地域創造の事業であるダン活も経験され、市民のみなさまとアーティストがコラボレーションしたことが心に残っており、コロナ禍で活動が制限され静かに過ごしている方々にとにかく元気になってもらいたいと４月の研修より熱意を持っていた。楠さんは普段は生涯学習推進センターに勤務しているため、ホールの事業に参画するのは初めてだが、常に冷静な視点で深見さんをサポートされ、情熱的な深見さんと冷静な楠さんとで絶妙なチームワークだった。

おふたりがおんかつのパートナーに選んだのは、隣の韮崎市出身のピアニスト・齊藤一也さん。双葉ふれあい文化館隣接の図書館には中学時代によく通っていたとおっしゃるほど、齊藤さんにとってもなじみの深い地域だった。

アクティビティ先は、大人向けのアクティビティに女性合唱グループの「ソラミミ」、70 ～ 80代のお茶会グループ「いきいきサロン上町南」、商工会婦人部に、そして未就学児向けには認定こども園の「光学園」に決定した。「ソラミミ」、商工会婦人部は双葉ふれあい文化館のリハーサル室にお迎えし、「いきいきサロン上町南」は敷島総合文化館、「光学園」は園内の教室へと普段活動の活動拠点にそれぞれお届けすることになった。

齊藤さんにとって初めての経験になったのは未就学児向けのアクティビティ「光学園」だった。「光学園」は、音楽活動に熱心で、双葉ふれあい文化館で年に１度音楽会と題して発表会を行っている。事前研修に訪れた際にも、園内の各所に音楽会のための本格的な衣裳や楽器などが並べられ、力の入れ具合が伺えた。アクティビティ実施に向けて、日ごろから齊藤さんのCDを園内で流し、当日まで園児のみなさんに親しんでもらえるようたくさんのご協力をいただいた。

齊藤さんは45分のプログラムの中で、前半30分は鑑賞型、後半15分はピアノ演奏体験コーナーと歌の共演コーナーを組み合わせ、飽きさせず楽しませる工夫を凝らした。齊藤さんにとっても初めての経験となったが、トイピアノを持ち込み視覚的にも楽しませたことや、園児のみなさんとのコミュニケーションも丁寧に行い、全体を通して落ち着いた進行を見せ、また、園児のみなさんもピアノの音が鳴り始めると、音楽に耳を澄ませてしっかりと齊藤さんの演奏を受け止めている様子だった。齊藤さん自身もこのアクティビティの後に、「子どもたちからたくさんのことをもらった」と述べており、子どもたちとの音楽を通した交流がよい形で実現できた。

大人向けのアクティビティにおいては、齊藤さん作曲の地元企業のCM曲や体験コーナーをはさみながら、最後には「ラ・カンパネラ」または中学１年生から弾き込んだ「ハンガリー狂詩曲 第12番」をしっかりと聴かせるプログラムをお届けした。参加者は音楽やトークに大きく頷き、ピアノの中を覗き込む方など、男女問わず好奇心旺盛に楽しむ様子が見られ、１時間を満喫していた。

コンサートの企画は、３月上旬で温かくなる季節を感じ思わずお出かけをしたくなるようなコンサートにしたい、堅苦しくなくわくわくするようなコンサートにしたいという深見さんの想いからスタート

し、「オトタビ　―10本の指で紡ぐ名曲の数々―」と名付けられた。また、深見さんよりSNSで市民のみなさまから甲斐市の風景を募り、齊藤さんの演奏とコラボをしたいとリクエストがあった。齊藤さんとの打ち合わせを経て、コンサートは２部で構成されることになった。前半は、SNSで市民のみなさまから集めた甲斐市の写真と齊藤さんがヨーロッパの街で撮影した写真を投影し、演奏とともに世界旅行を楽しんでいただく内容を、続く後半は、純粋に音楽に楽しんでいただく内容をお届けすることになった。コンサート当日は、ロビーではSNSで集まった写真全19枚を掲示して、地元出身のアーティストを応援する300名を超えるお客様をお迎えした。

最後に、甲斐市おんかつを振り返り、成功の鍵となったのは、ホール担当者がアーティストと地域の方々をつなぐ役割をしっかりと担っていたことだと感じた。担当となった深見さんを中心に、アクティビティ先との丁寧なコミュニケーションに加え、写真を通じた地域の方の参加方法、アーティストへの明確なリクエスト、実現したいことを伝える･共有することができおり、安心して実施日を迎えられた。また、双葉ふれあい文化館は、原田館長・深見さん・佐々木さんの常駐職員３名でホール運営をしているが、みなさんが音楽を楽しむ心をもち、また、目の前の方に良いものを届け、純粋に喜んでもらいたいという気持ちから真摯にお仕事をなさっていることに大きく支えられた。次年度以降の継続に向けて、更に地域の方々、アーティストを巻き込み、独自の企画として発展されることを期待したい。

実施団体：公益財団法人伊賀市文化都市協会
実施時期：令和４年10月31日（月）～令和４年11月３日（木・祝）
出演アーティスト：竹多　倫子（ソプラノ）　木村　裕平（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：竹多倫子ソプラノコンサート
～歌のチカラで元気に～
期　　日：令和４年10月31日（月）　11：00～11：50
会　　場：ふっくりあホイスコーレ　多目的ホール
参 加 者：通所者　23名

ホールに来場する機会が少ない障がい者が通う就労移行訓練施設でのコンサートを行いました。音楽に合わせて笑顔で体を動かす人、元気よく竹多さんと同じ仕草をする人など、音楽を身近に楽しんでもらえる機会となりました。また、参加者の中に曲を作詞した人もおり、竹多さんの前で歌を披露するなど和やかなムードでコンサートが進みました。

タイトル：竹多倫子ソプラノリサイタルin伊賀
～歌のチカラで元気に～
期　　日：令和４年10月31日（月）　14：00～14：50
会　　場：梨ノ木園（盲老人ホーム）　ホール
参 加 者：入所者　36名

ホールへの来場が大変困難な視覚等障がい者が入所する福祉施設でコンサートを行いました。事前聞き取りでは音に大変過敏な人が多いと聞いており、一番心配していた実施会場でしたが、予想に反し、深く聴き入っている人が多く見受けられ、プログラムの後半では、積極的に手拍子をするなど、会場が一体となったコンサートとなりました。

タイトル：竹多倫子ソプラノコンサート
～歌のチカラで元気に～
期　　日：令和４年11月１日（火）　11：00～11：50
会　　場：総合福祉会館（伊賀市社会福祉協議会）　ロビー
参 加 者：施設利用者、障がい者家族等関係者　32名

地域の社会福祉拠点である総合福祉会館で施設利用者や障がい者家族などを対象としたコンサートを行いました。プログラム内の唱歌メドレーでは、昔を懐かしんで感慨深い様子の人が多くいました。終了後には「とてもよかった。是非ホールに聴きに行く」など多くの人の声を聞き、とても良い交流が持てたコンサートとなりました。

タイトル：竹多倫子ソプラノコンサート
～歌のチカラで元気に～
期　　日：令和４年11月１日（火）　14：00 ～ 15：40
会　　場：あやまユートピア　研修室
参 加 者：入所者、介護担当者　26名

市内のグループホームの入所者や、普段ホールに来場することが困難な介護担当者を対象としたコンサートを行いました。入所者は高齢のため日本の唱歌メドレーの中の「朧月夜」の話に共感する人が多く、プログラムが進むにつれ、竹多さんとの受け答えも出来るようになるほど元気になった人も見受けられる充実のコンサートとなりました。

コンサート

タイトル：竹多倫子ソプラノリサイタルin伊賀
～歌のチカラで元気に～
期　　日：令和４年11月３日（木・祝）　14：00 ～ 15：30
会　　場：あやま文化センター　さんさんホール
参 加 者：一般、福祉施設等関係者　81名

ホールコンサートでは親しみやすい日本の唱歌メドレーから本格的なオペラのアリアまで、さまざまな楽曲を楽しめるプログラムでした。アンコールの中では、10月31日のふっくりあホイスコーレのアクティビティで参加者が作詞した曲を、竹多さんがサプライズとして披露し、施設の人たちと素晴らしい交流があったことを観客に伝えました。お客様も大変感動した様子で、とても意義深い内容のコンサートとなりました。

ホール担当者の意見・評価
事業課　坂井　充

①　応募の動機・事業のねらい

普段、ホールに来場するのが困難な高齢者や障がい者の方々に良質な音楽を届け、音楽の素晴らしさに触れていただく機会を提供し、音楽を活力にしていただく為、また、社会包摂やSDGsにも繋がる「誰もが文化芸術に触れあえる機会の創出」に取り組みたいと考え、応募いたしました。

②　企画のポイント

今回は普段、クラシック音楽を聴く機会の少ない環境で暮らす人々に音楽を届けたく、直感的に伝わりやすい耳馴染みのある曲などを取り入れ、施設利用者に音楽を身近に感じてもらうことで、音楽や歌のパワーを届け、ホールコンサートでは地域のさまざまな人々に歌のチカラを感じていただけるような音楽を届けたいと企画しました。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

本公演開催日が「文化の日」になっており、市内各地で催事や音楽関係団体のコンサート等さまざまな催事や展示会などが重なり、本公演の集客に大変苦労しました。

④　上記③をどのようにクリアしたか

地域情報紙に広告掲載や記事に取り上げてもらったり、ＰＶを作成し広報宣伝を行いました。また、アクティビティ先である福祉施設関係者や音楽関係者に本公演に来てもらえるよう関係各所に招待を行いました。

⑤　事業を実施しての成果

アクティビティは当協会では初めてとなる福祉施設での実施のため、当初はどうなるのかと心配していたが、参加した皆様が音楽に合せて身体を動かし、出演者の問いかけに反応するのが見てとれました。それは、ホールに来場するお客様より多感であり、感受性が豊かであると思いました。この事業で「元気になった」と声をもらい、ホールでの本公演にも来場いただけ、福祉施設関係者にも音楽で繋がりが出来たことが大きな成果となりました。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

本公演日程を決定する際、地域の催事や時期的に関係各団体が催事を行っていないかを確認し、日程を決定すべきであると思いました。また、打合せや連絡は行っておりましたがアクティビティ先の担当者が急遽変わったこともあり、担当者が時間を勘違いして公演時間が変更になったケースもあり、もっと連絡を密に取り、情報共有を行うべきであったと思います。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

伊賀地域ではまだまだホールでの音楽鑑賞や文化芸術に触れたことがない人が多いのは事実です。これから先もっと伊賀地域のさまざまな立場の人に音楽や文化芸術を届け、アウトリーチやホール公演により、１人でも多くに文化芸術に触れてもらう事が重要であると感じました。

アシスタントレポート
菊地　俊孝（一般財団法人日本民間公益活動連携機構プログラム・オフィサー）

三重県伊賀市は京都や奈良、伊勢に隣接する地域として宿場町として栄えた歴史ある地域であり、伊賀流忍者の里や松尾芭蕉生誕の地として知られるなど、歴史資産を早くから観光資源化することに成功した都市である。

今回おんかつを実施したのは、地域の文教施設を数多く管理する公益財団法人伊賀市文化都市協会。担当者の坂井さんは、邦楽活性化事業を経験し、子どもたちに音楽体験を届けた経験がある。今回のおんかつ事業では、ホールに来場することの困難な高齢者や障がい者の方々を対象として事業を企画。アーティストは、ソプラノの竹多倫子さん、実際に歌声を聞き、この歌声を地域の人たちに届けたいと思ったことから伊賀市に招聘したのである。

今回竹多さんとともに訪問するアクティビティ先は、盲老人ホームである梨ノ木園、特別養護老人ホームあやまユートピア、障がい者就労移行訓練施設ふっくりあホイスコーレで、高齢者の方々、障害を持った方々を対象として実施。さらに、地域の老人施設や障がい者施設などの社会福祉の拠点である伊賀市社会福祉協議会での実施となった。

ご高齢の方々や障害をもった方々にどのように音楽体験を届けるか、竹多さんも坂井さんより様々な情報を入手しながらプログラムを組み立てた。誰もが耳にしたことのある日本唱歌からオペラまでを日本人が知っている曲からイタリア人が知っている曲までと紹介。音楽は人の記憶と連動し、においや風景などの思い出を届けてくれること、また喜怒哀楽など人々の心を表現していること、聞く場所や日が違うとまた音楽が違って聞こえるなど心の機微にふれるプログラムで、対象者にあわせた細かな配慮のあるプログラムであった。印象的であったのは、ホイスコーレでのアクティビティの際に後方で手拍子をしない女の子３人が座っており、うち１人は耳を塞いでうずくまるようにしている子がいた。後で施設の方にお話しを聞くと、普段はこのような時間椅子に座っていられず、部屋を出てしまうという子達とのこと。今回のアクティビティでは最後まで自分の席で聞いてくれていたことに施設の方は驚いていた。また、アクティビティでは出会いもあった。施設に通う女の子が自分で作詞した曲を披露、自分の周囲の人たちへの感謝を歌った曲であった。これには竹多さんも感動し、小学校とは違う物語があるアクティビティとなり、参加してくれた多くの人たちの心に残るアクティビティとなったのではないだろうか。

コンサートでは、前半部分では耳にした曲を中心として、後半は映画音楽からオペラまでと竹多さんの魅力が十分に伝えられるプログラムとなっており、来場者もまた音楽の楽しさ、奥深さを知ることのできるコンサートとなったのではないだろうか。今回のコンサートのトピックスとして挙げられるのは、アクティビティで出会った女の子の曲を紹介し、アクティビティとコンサートが人と人を繋げることができるおんかつならではの効果を感じることができたことだ。

こうした一連のアクティビティとコンサートを通じて得たおんかつならではの効果は音楽を届ける対象者だけが享受することではない。特に今回のおんかつでは音楽を届ける側のスタッフにも現れたのではと感じている。主催団体である伊賀市文化都市協会は、年間70本もの多くの事業を実施しているが、坂井さんは、今回の事業を通じて、１つの事業の効果をしっかりと捉え事業を実施していくことの重要性を感じておられた。文化施設が事業を実施していく先にどのような目的、達成すべきことがあるのかをしっかりと考えていく必要性があると思う。また、それを温かい目で見守ってこられた服部館長をはじめとした財団スタッフの方々の存在がとても心強く、事業はひとりで実施するものではないことも感じられるおんかつとなった。このように気づきや協力体制、地域とのコミュニケーション、関係性を構築する事こそがおんかつ事業の一番の効果といえる。今後も伊賀市文化都市協会が地域の文化芸術を牽引する組織として、ますます充実していくことを願っている。

実施団体：舞鶴市
実施時期：令和５年１月20日（金）～令和５年１月22日（日）
出演アーティスト：新野　将之（打楽器）　齋藤　綾乃（打楽器）

アクティビティ

タイトル：音楽鑑賞、楽器演奏の共演
期　　日：令和５年１月20日（金）　10：45 ～ 11：30
会　　場：京都府立舞鶴支援学校　体育館
参 加 者：中学部　43名

出演アーティストによる演奏の披露と、参加者が演奏するハンドベルにアーティストが即興で参加する共演を行った。この日を目標に練習してきた生徒達はアーティストとの共演に少し緊張も見られたが、自信を持って演奏しているように感じられた。アーティスト手作りの楽器を使って演奏に参加する場面もあり、口々に「楽しかった～」という感想が聞かれた。

タイトル：音楽鑑賞、楽器演奏の共演
期　　日：令和５年１月20日（金）　13：30 ～ 14：15
会　　場：京都府立舞鶴支援学校　体育館
参 加 者：高等部　45名

出演アーティストによる演奏の披露と、参加者が演奏する三宅太鼓にアーティストが即興で参加する共演を行った。リハーサルよりも本番の方がどの生徒も上手く演奏できており、アーティストの演奏も重なって非常に完成度の高いものとなった。打楽器に興味のある生徒も多く、プロの演奏に見入っている様子であった。アーティストの問いかけにも良い反応が見られた。

タイトル：音楽鑑賞
期　　日：令和５年１月21日（土）　14：00 ～ 14：30
会　　場：社会福祉法人　みずなぎ鹿原学園　食堂
参 加 者：利用者　30名

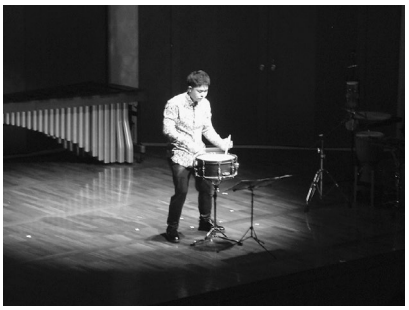
アーティストによる演奏を間近で鑑賞いただいた。終始楽しんでおられる様子が見え、問いかけにもよく反応されていた。アーティストの超絶技巧を用いた演奏には「大成功～」との掛け声が上がった。同施設オリジナルの絵本「ぬーたんがとぶ日」の音楽付き朗読では、可愛らしい音色や工夫の凝らされた演奏・朗読に興味深く聴き入っておられた。一緒に鑑賞された職員の方々も感動されている様子であった。

タイトル：演奏に合わせて身体を動かそう
期　　日：令和５年１月21日（土）　14：35～15：05
会　　場：社会福祉法人　みずなぎ鹿原学園　食堂
参 加 者：利用者　30名

アーティスト手作りの楽器を配布し、音楽に合わせてみんなでジャングルのような音を奏でる体験をしていただいた。音の出し方もすぐに理解され演奏に合わせて思い思いに楽器を奏でることが出来た。ボディパーカッションで参加する「マンボのビート」では、皆さん待ってましたとばかりに立ち上がり、音楽に合わせて身体を楽器に演奏されていた。笑顔の方、真剣な表情の方と様々であったが、どの方も音楽を楽しんでおられる様子だった。

コンサート

タイトル：バリアフリーコンサート　新野将之　みんなの打楽器コンサート
期　　日：令和５年１月21日（土）　14：00～16：00
会　　場：舞鶴市総合文化会館　小ホール
参 加 者：173名



第１部は、クイズや楽器紹介、ボディパーカッションなど鑑賞者参加型のコンサートとなった。問いかけへの反応も良く、「おぉ～」という声が漏れ聞こえる場面もあった。第２部は、絵本の音楽付き朗読や、電子音との共演など幅広い演奏方法を楽しんでいただいた。小さな子ども達も演奏が始まるとピタッと静かになり、初めての体験をしている様子だった。乳幼児から高齢の方、障害のある方など様々な方に参加いただけた。

ホール担当者の意見・評価
文化振興課　佐藤　智春

①　応募の動機・事業のねらい

普段会館に足を運ぶことが少ない障害者の方へ働きかけ、文化に参加するきっかけづくりとし、障害者の方と接点の少ない方には障害福祉の現状について考える機会としていただく。

また年齢や障害の有無等個々の境遇にとらわれず、音楽を楽しむことを通して一体感を味わっていただきたい。

②　企画のポイント

アクティビティでは障害者施設へ出向き、鑑賞だけでなく参加型のアウトリーチを取り入れて実施した。コンサートは会場のバリアフリー構造を活かし、車いす・ベビーカーのままでの鑑賞を可能とし、年齢制限も無しとした。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

実際に障害のある方にコンサートへ来ていただくためには、送迎や付き添い等をしていただく必要があるため、コンサートへの集客に大変苦労した。また未就学児は無料であったため、事前の人数把握が出来なかった。

④　上記③をどのようにクリアしたか

障害福祉課に相談し、来場が可能な方を紹介いただきご案内することが出来た。またアウトリーチ先でもコンサートへのご案内を実施し、当日来場いただくことが出来た。

コンサート当日の会場案内係を多く配置することで、座席を増やす・撤去する・移動する等の対応がスムーズに行えた。

⑤　事業を実施しての成果

アウトリーチ先として選択した両施設には実施を大変喜んでいただくことが出来た。参加者にも音楽の楽しさや､共演を通しての達成感も味わっていただくことができたのではないかと思う｡バリアフリーコンサートは初めての試みで集客も大変心配したが、実際には幅広い年代・境遇の方が来場くださり、この事業の必要性を感じることが出来た。また、事業全体を通して、コーディネーターの皆さんやアーティストの方等とのやり取りを拝見し、コンサートとはこんな風に創り上げていくものなんだという事を実感出来たことが大きな成果であった。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

マネジメントと直接やり取りすべき事が分からず、詳細な調整がギリギリになってしまった。また、コーディネーターの皆さんに頼りきりになってしまい、アーティストにこちらの思いや意見等をしっかりお伝え出来なかった。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

有名ではないアーティストのコンサートはなかなか集客が難しいと思っていたが、コンサートの内容やコンセプト、広報の仕方等で十分集客が見込めることが分かった。また、アウトリーチ先の施設にも大変歓迎していただき、アウトリーチを今後も実施していくことが重要であると感じた。更に障害の有無等に関わらずどんな方でも参加出来るコンサートや催しは今後も必須であり、小ホールやホワイエ等も有効的に活用することで、可能性を広げられるのではと思った。

アシスタントレポート
佐藤　良子（芸術文化観光専門職大学 研究支援コーディネーター）

〈はじめに〉

京都府北部の港町、舞鶴市は人口約７万７千人ほどで、歴史的に西舞鶴と東舞鶴の二つの地域から成る。かつて海軍が置かれ、今も海上自衛隊が配備されている東舞鶴には、海軍ゆかりの「赤れんがパーク」などの施設や、地元の新鮮な魚介が味わえる飲食店などの観光スポットも少なくない。今回のおんかつは、その東舞鶴にある舞鶴市総合文化会館が舞台である。文化会館には1400席余りの大ホールと350席程度の小ホールがあり、おんかつのコンサート会場としては小ホールを使用することとなった。

〈舞鶴市おんかつのコンセプト〉

ご担当の舞鶴市文化振興課の佐藤智春さんは、障がいのある人も、そうでない人も、そして未就学児を含むあらゆる世代が､あたりまえに同じ空間で､共に「音楽っていいな」と思える「心のバリアフリー」なコンサートを作りたいという夢を持っておられた。しかし、実際に実施するとなれば、誰を対象にどのような内容とするのか、どんなチラシを作ればよいのか、チケット料金はどのように設定すればよいか・・コンサートの企画を具体化するにあたって、佐藤さんの夢は相当厚い雲に覆われていたと思う。１泊２日の個別研修で時間ぎりぎりまで話し合ったうえで、コンサートのコンセプトはその後も粘り強く練り続けた。

アクティビティ先は京都府立舞鶴支援学校（中学部・高等部）と社会福祉法人みずなぎ鹿原学園で、いずれも知的・身体的な障がいのある子どもたちや大人の方々が対象である。個別研修では支援学校の校長先生や担任の先生、そしてみずなぎ鹿原学園の園長先生や担当職員の方々から、普段の活動内容や、子どもたち・利用者の方々にどのような想いを持って接しておられるのかなど、いろいろなお話をお聞きすることができた。舞鶴支援学校の校長先生からは、いかに人と繋がれるのか、接点を持つことができるのかを考え､その子らしく生きていけるようにサポートしているということ。だからこそ社会には、そうしたハンディキャップのある人たちを受け止めるアンテナを持って欲しいということを、初対面ながら率直にお話いただき、我々おんかつスタッフはその想いを今回のアーティストである新野さんにお伝えしなければと思ったのである。

あらためて、今回の舞鶴市おんかつのアーティストとしてオファーされたのは打楽器奏者の新野将之さん。おんかつアーティストを選ぶ公開プレゼンテーション（2022年４月）では、手作り楽器を参加者とともに演奏する場面があり、その時に舞鶴市の佐藤さんは「この方なら」と思ったそうだ。ステージ上で渾身の演奏を披露すると同時に、ステージと客席の接点を作り出す工夫。そこに、今回のコンセプトに通じるものを感じたということかもしれない。

〈本番のプログラム〉

コンセプトを踏まえ、具体的なプログラムの中では、アクティビティ先の対象者の皆さんや、ホールにお越しくださるお客様とどのように繋がれるか、が重要なポイントになった。舞鶴支援学校では、昼休みを利用して子どもたちが練習を重ねている「三宅太鼓」で新野さんと共演することになったし、みずなぎ鹿原学園では、自分では飛べないと思っていたオオミズナギドリの「ぬーたん」が、少し手を差し伸べてもらうだけで大空を飛べるようになるという同学園のオリジナル絵本「ぬーたんがとぶ日」に、新野さんが曲を付けることで、コラボレーションできることになった。またコンサート当日、アクティビティ先の方々が作った作品をホールのロビーで展示するという案にも、両施設から賛同をいただき、展示することができた。

それでもなお、実際にご参加くださる対象者の方々に、新野さんのプログラムを通してどのようにア

プローチできるのか、アクティビティ前日のランスルーでも試行錯誤だった。だが、「プロの打楽器奏者の新野さんでも難しいことはある。負けずに、逃げずに、やってみようと思うことが大事」というメッセージを込めて、共演や参加型プログラムにチャレンジするとともに、最後は新野さんにとっても難曲の「ルボンB」（I.クセナキス作曲）を聴いていただくことでプログラムを終えるという流れで最終的にまとまった。

このプログラムは大変聴きごたえのあるものとなり、子どもたちや利用者の方々の生き生きした反応に支えられ、アクティビティ１回１回が熱気に溢れた素晴らしい演奏や共演であった。「三宅太鼓」を打つ子どもたちの太鼓の音は、新野さんのパワーに負けず劣らぬ魂のこもった音。新野さんもそれに触発され、渾身の「ルボンB」を演奏し、お互いの想いを届け合ったのである。

一方、最終日のホールコンサートは、新野さんがアーティストとしてやりたいことを実現できるよう、最大限サポートいただいた会館の技術スタッフの方々の支えが本当に心強かった。挑戦的な曲目から皆がボディパーカッションで参加できる「マンボ」の曲まで、様々な世代やハンディキャップのあるお客様も巻き込んだライブ感たっぷりの充実した内容。アクティビティ先でお世話になった皆様もご来場くださり、小ホールに大入りのお客様をお迎えすることができた。

今回のおんかつをご担当くださった舞鶴市の職員の皆様や舞鶴市総合文化会館のスタッフの皆様は控えめながらも細やかにお気遣いくださる方々。そんな方々がチームとなって新野さん・共演者の齋藤綾乃さんを迎え、皆で協力する日々を過ごすうち、いつの間にか各自の持ち場でより良くするにはどうすればいいか、話し合い、それぞれの作業が一つに繋がっていったことが、熱気に包まれたコンサートに結実した。終演後のアーティストとスタッフの振り返りの時間が名残惜しく感じたのは、間違いなくその場にいた全員だったと思う。この経験が今後も共有され、繋がっていくことを願っている。

実施団体：PFI東大阪文化創造館株式会社
実施時期：令和４年11月24日（木）～令和４年11月26日（土）
出演アーティスト：石上　真由子（ヴァイオリン）　城　綾乃（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：石上真由子ヴァイオリンミニコンサートin
東大阪養護老人ホーム
期　　日：令和４年11月24日（木）　10：15～11：00
会　　場：東大阪養護老人ホーム　交流スペース
参 加 者：入居者　24名

老人ホームの入居者を対象に実施した。高齢者が多いことから新型コロナウイルス感染拡大防止対策としてアーティストと入居者との距離を大幅に取ることとなった。トークを交えながら、聴き馴染みのある「赤とんぼ」や「荒城の月」など日本の作曲家たちの作品や、その作曲家の先生である幸田延作曲の「ヴァイオリン・ソナタ第２番」などを演奏した。入居者は演奏に聞き入っていて、老人ホームの職員からも「入居者の方が楽しそうに聴いていた。またぜひ開催して欲しい」との声をもらった。

タイトル：石上真由子ヴァイオリンミニコンサートin
花園北小学校３年１組
期　　日：令和４年11月24日（木）　13：45～14：30
会　　場：東大阪市立花園北小学校　音楽室
参 加 者：３年１組　25名

花園北小学校３年１組の児童を対象に実施した。当日は会場である音楽室の壁に、児童が書いたアーティストへのメッセージやイラストを飾っていたりと歓迎ムードであった。先生を通じて事前に石上さんの経歴などを学習したこともあり、児童たちは石上さんのお話や演奏を興味深々で聴いていた。また、プログラムの一つとして、動物をイメージして作曲された「若林千春/アイオーソ～ヴァイオリンのために～」を聴いて想像した動物を絵で描いてもらったが、児童たちは真剣に取り組んでいた。

タイトル：石上真由子ヴァイオリンミニコンサートin
花園北小学校３年２組
期　　日：令和４年11月24日（木）　14：50～15：35
会　　場：東大阪市立花園北小学校　音楽室
参 加 者：３年２組　25名

花園北小学校３年２組の児童を対象に実施した。当日は会場である音楽室の壁に、児童が書いたアーティストへのメッセージやイラストを飾っていたりと歓迎ムードであった。先生を通じて事前に石上さんの経歴などを学習したこともあり、児童たちは石上さんのお話や演奏を興味深々で聴いていた。また、プログラムの一つとして、動物をイメージして作曲された「若林千春/アイオーソ～ヴァイオリンのために～」を聴いて想像した動物を絵で描いてもらったが、児童たちは真剣に取り組んでいた。

タイトル：石上真由子ヴァイオリンワークショップ
期　　日：令和４年11月25日（金）　10：30 ～ 11：30
会　　場：東大阪市文化創造館　Dream House 大ホール
参 加 者：東大阪市立意岐部小学校３年１組　35名

意岐部小学校３年１組の児童を対象に、大ホールの舞台上で実施した。普段乗る機会があまりない舞台上に乗った児童たちは終始興奮気味だった。児童たちは石上さんのお話や演奏を興味津々で聴いていた。また、プログラムの一つとして、動物をイメージして作曲された「若林千春/アイオーソ～ヴァイオリンのために～」を聴いて想像した動物を絵で描いてもらったが、児童たちは真剣に取り組んでいた。

コンサート

タイトル：石上真由子ヴァイオリンコンサート
期　　日：令和４年11月26日（土）　14：00 ～ 15：30
会　　場：東大阪市文化創造館　Dream House 大ホール
参 加 者：381名

２部構成で休憩を挟んだ約２時間の公演を実施した。「夢」をテーマにしたプログラムで、１部では石上さんにとって思い入れのある「ツィガーヌ」、２部では「ブラームス：ピアノとヴァイオリンのためのソナタ第１番」などを演奏した。

ホワイエではアクティビティで児童たちが描いた絵や実施した様子の写真を展示した。展示している旨を公演中のMCで石上さんがお話してくださったため、休憩や終演時には多くの人に見てもらえ、会館（おんかつ）の活動について知ってもらえた。

ホール担当者の意見・評価
所属：東大阪市文化創造館　事業企画担当　吉丸　彩奈

①　応募の動機・事業のねらい

当館は開館して４年目であり、開館後２年間は施設周知のために鑑賞事業を中心に実施し、３年目以降は市民に参加の機会を提供する参加・普及事業に重点を置き、ワークショップやアウトリーチ事業に着手する計画だったが、コロナ渦に見舞われ計画通りに実施できていないことからノウハウの蓄積も少ないという経緯があった。実施できていなかったアウトリーチの回数を確保するとともに、職員が地域性を鑑みたバリエーションのある企画を行うためのスキルアップの機会を得るために今回の事業を実施した。

②　企画のポイント

アクティビティやコンサートを通して人と人とが繋がる機会や、本格的なプロの演奏を聴くことで文化芸術に触れるきっかけを創出し、将来的に子どもたちが自発的に文化芸術に触れてもらうことを目標とした。そのために敷居が高いと感じるクラシックを、同じ関西出身のヴァイオリン奏者 石上さんと触れ合うことにより親しみを持ってもらうことを狙った。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

当初は病院でアクティビティの実施を考えていたが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から断念した。新型コロナウイルス流行から２年以上経過しても、未だに思う通りに事業を実施できないことに歯がゆさを感じた。

また、市内51か所ある小学校の中から決め打ちで交渉することで不平等が生じてしまうため、どの学校で実施するかをどのように決めるか悩んだ。

④　上記③をどのようにクリアしたか

病院については、今回はアクティビティの実施を断念し養護老人ホームで実施した。

小学校については、市内51か所すべてにアクティビティ実施先の募集の案内を配布し、応募があった中で条件に合う小学校で実施した。応募多数でやむを得ず実施を見送った小学校に対しては、今回の対象であった小学３年生の児童とその担任の先生を最終日のコンサートに招待して石上さんの演奏を聴いてもらうことができた。

⑤　事業を実施しての成果

アクティビティとホール公演を通して、市内の養護老人ホームおよび小学校、アーティストなど様々な方との今後にも繋がる繋がりができたことが一番の成果である。

今回初めてヴァイオリンの生の音を聴いた児童が多く、アーティストとの距離も近く親しみを持ったようで「ヴァイオリンがかっこよかった。アーティストをこれからも応援している」との旨の感想が多かった。今後も文化芸術に触れるきっかけを創出するという目標を達成できたように感じる。また、インリーチでは児童たちにとって当館がより身近に感じるきっかけになったようである。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

ホール公演に、アクティビティを実施した小学校および条件が合わずやむを得ず実施を見送った小学校を招待したが予想より来場が少なかった。

また、子どものうちから本格的なクラシックの演奏に慣れ親しんでもらうために小学生以上のファミリーをターゲットにしていたが、他のクラシック主催公演よりは小学生の来場があったものの想定より

は少なく、狙ったターゲット層への広報宣伝が上手くできていなかった。狙ったターゲット層へ我々の想いを届けるために、どのように広報宣伝していくかが今後の課題である。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

初めてヴァイオリンの生の音や演奏を聴いたという子どもが多く文化芸術に触れる機会が少ないこと、また文化芸術に触れる機会を提供する公共文化施設の役割は重要だと改めて痛感した。特に子どもたちにとっては触れる機会がないだけで子どもたち自身は興味を持っているため、地域性を鑑みた事業の回数を確保し継続的に続けていくことが大事であると再認識した。今後もニーズにあった事業を展開していきたい。

アシスタントレポート
栄　咲季（公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化会館 事業企画課 事業係）

《はじめに》

東大阪市文化創造館は創立してからまだ４年目の新しいホールだ。1,500人を収容できる大ホールと300席の小ホール、展示やワークショップができるギャラリー、いくつかの会議室やリハーサル室、市民の寄贈から成り立つ図書室とそれに併設されたカフェなどがあり、建物は全体的にコンクリート調でモダンな雰囲気が感じられる。30分ほど電車に乗れば大阪の中心地に移動でき、都会的である一方、反対側に位置する奈良県の穏やかさも感じられる街である。

東大阪市文化創造館は、創立４年目として事業の可能性を広げたいとのことで、おんかつ事業に申し込んでくれた。演奏を依頼したアーティストは石上真由子さん、共演者は城あやのさんで２人とも関西出身である。東大阪市文化創造館からは、ホール創立初年度からお仕事をされている吉丸さんと２年目となる西川さんが制作にあたってくださった。地域創造からは赤木コーディネーターとおんかつ担当の田中さん、そしてアシスタントの栄で伺った。

《東大阪市での事前の打ち合わせ》

事前の打ち合わせにて、吉丸さんと西川さんより、東大阪市は大きな市ではあるものの市民の文化創造の拠点となるようなホールは文化創造館の他はないという点、また、子どもが多く住む地域（小学校が市内に51校もあるとのこと）ではあるが、小学生など子どもを対象とした音楽事業を実施できていないという話を聞いた。今回は、小学生の子どもたちを中心に文化創造館に親しみを持ってもらい、これからもっと遊びに来てほしいという願いをもとに、内容を考えていくこととなった。

《アクティビティ》

アクティビティは、まず吉丸さんがもともと実施を希望していた入居型の老人ホームへ伺った。演奏会場は､ホームの中でも普段団らんの場所として使っている広い会場を使わせていただくことになった。感染症対策として座席と演奏位置の距離をとって実施し、石上さんの位置からは聴いている方々の反応が見えづらく、ややコミュニケーションをとるのが難しい様子であった。しかし曲のタイトルをメモされる方や､１曲１曲に大きな拍手をしてくださる方など､石上さんの演奏とお話を真剣に聴いてくださった。だんだんと人が溢れ、廊下にまで席を作ったほど多くの方が楽しんでくださった。

そのほかのアクティビティについては、市内で応募のあった小学校の児童を対象に実施した。文化創造館から車で20分の場所に位置する花園北小学校と、ホールにて来てもらうインリーチ型に応募してくれた意岐部小学校の小学３年生に対しての実施である。花園北小学校では、音楽室へ続く廊下が石上さんの歓迎のメッセージで溢れ、先生と生徒たちがこの日のために一生懸命準備してくれたのだと胸が熱くなった。文化創造館に来てもらった意岐部小学校は、舞台上のピアノをぐるりと囲むように半円状に椅子を設置し、生徒たちは「ホールに来た！」というワクワク感でとにかく元気いっぱいであった。45分の授業時間の中で、ヴァイオリンの魅力がたっぷり詰まった楽曲を聴いてもらったり、ある１作品を聴いて何の動物を思い浮かべたか絵を描いてもらったりした。両校とも、生徒たちも先生も皆、石上さんの演奏、言葉を素直に聴き、それぞれが自由な感想を持ち、アクティビティの時間を楽しんでくれた。

《コンサート》

コンサートは、ホールの方々の狙いや思惑がそのままコンサートのテーマとして活かされることが多い。今回も、石上さんに単に演奏をしてもらうだけではなく、音楽を通してどのようなメッセージを東大阪市の皆さんに届けたいかについて、吉丸さん、西川さんの２人に考えていただいた。事前の打ち合

わせで、２人からの「石上さんのヴァイオリンに対する気持ちや音楽家として将来を決めた姿がかっこいい」という話をヒントに、東大阪市文化創造館のキャッチコピー「夢に出会う。夢に向かう。夢を叶える。」をテーマにすることに決めた。

「夢」がテーマということで、演奏プログラムは石上さんのこれまでの人生・夢に関連してきた曲を多く入れてもらい、トークでも「夢」の話や石上さんのバックグラウンドなどを話してもらった。ヴァイオリンと医者という夢を持ち、悩みながらも叶え、時には選択し、そしてこれからも様々なことに挑戦していきたいという石上さんの話から、お客様が、石上さんを１人の夢に向かって努力する人間として親しみを感じてくれたような気がした。大ホールだったにもかかわらず、会場の広さを感じないアットホームであたたかい空気が流れていた。

プログラムの最後はブラームスのヴァイオリンソナタ１番を全楽章演奏した。30分ほどの長い曲だったにも関わらず、お客様の集中力が凄まじく、舞台上の演奏に惹きつけられていたのがよくわかった。お客様一人一人が、石上真由子さんという１人の音楽家の存在を近く感じてくれたからこその一体感だったと感じる。

ロビーでは、アクティビティ全４回の様子の写真や、また、アクティビティで小学生たちに描いてもらった絵など、この３日間ほどの活動をパネルで掲示した。多くのお客様が見てくださり、文化創造館の今回の取り組みを市民の皆さまに直接紹介できたことは嬉しかった。

《おわりに》

今回の東大阪市では、熱い方々と多く出会った。担当の吉丸さん、西川さん、そして２人を見守ってくださった若菜さんや渡辺館長をはじめとする東大阪市文化創造館の皆さま。事前の広報展開やアクティビティ先との丁寧な打ち合わせ、ロビーの展示準備があったからこそ、全ての行程が無事に盛会に終了できた。

そして、市役所の職員の方々も熱心な方ばかりであった。事前の下見の際に、渡辺館長から市との繋がりを大切にしているという話を聞いていたが、市役所の職員の方々も文化創造館のことを大事に思っているのがよく分かった。全てのアクティビティに視察にいらしていて、石上さんの演奏、入居者の方々や子どもたちの様子を熱心に見てくださったのが大変印象的であった。コンサートにおいても最初から最後まで聴いてくださり、展示もじっくりと見てくださった。東大阪市では、リアルにその場で起こっていることを行政がしっかりと見て感じ、そして行政と現場が芸術の必要性や重要性、事業実施に必要な行程やその場の空気感などを分かち合っていた。こんなにも強い協力体制はほかにないかもしれない。

インリーチで関わった意岐部小の１人が翌日のコンサートにも来てくれて、西川さんに「また来たよ」と声をかけたという。それに対し、西川さんは「おかえり～」という言葉が思わず出たとのこと。このやり取りが、今回の東大阪市文化創造館のおんかつを象徴していると感じた。

まだまだ４年目で始まったばかり。これから人と人との輪をさらに広げていき、東大阪市文化創造館が市民に親しまれる文化創造の拠点として、そして心の拠り所として存在するようになるのだろう。これからの可能性に期待である。

実施団体：海田町教育委員会
実施時期：令和５年１月19日（木）～令和５年１月22日（日）
出演アーティスト：梅津　碧（ソプラノ）　小埜寺　美樹（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：クラシックに親しもう
～ふかいふか～いオペラの世界～
期　　日：令和 ５年 １月19日（木） 15：45 ～ 16：30
会　　場：海田町立海田西中学校　音楽室
参 加 者：１～３年生　41名

吹奏楽部員と希望者を対象に、普段は聴くことのないオペラ歌手の歌声を通じて、クラシックの魅力を感じてもらうことを目指しました。歌い始めた時は、初めての体験で驚きが勝り、あまり反応がありませんでしたが、梅津さんが生徒たちへの問いかけを続けていったことや、「きらきら星」で一緒に曲を作り上げたことでしだいに打ち解けていき、なぜオペラ歌手になったのかという話をされた時には熱心に聞き入っていました。最後は梅津さんと小埜寺さんと写真撮影をして、交流を深めていました。コンサート当日には、吹奏楽部の生徒たちが来場し、感謝の気持ちを綴った色紙を梅津さんと小埜寺さんに渡してくれました。

タイトル：ココロに響くクラシック
～魅力あふれるオペラの世界へようこそ～
期　　日：令和５年１月19日（木） 17：45 ～ 18：30
会　　場：特別養護老人ホーム花みずき　地域交流スペース
参 加 者：施設職員 ７名

特別養護老人ホームはここ数年コロナ禍で常に緊張を強いられている状況のため、職員の癒しの時間にしてもらいたいという要望をもとに実施しました。アクティビティの事前打ち合わせの時に、梅津さんから大好きな叔母とのエピソードとともに、介護に携わる人たちへの感謝の気持ちを伝えたいということで、そのエピソードと武満徹の「小さな空」を組み合わせ歌うというプログラムを行いました。「小さな空」は、介護に携わっている参加者の心に強く響き、感動的なアクティビティとなりました。また、７名と少ない人数での実施でしたが、施設の職員の方にとっても、スタッフにとっても貴重な体験となりました。

タイトル：クラシックを楽しもう　～歌ってたのしい！！～
期　　日：令和５年１月20日（金） 11：25 ～ 12：10
会　　場：海田町立海田西小学校　音楽室
参 加 者：６年生　34名

初めてクラシックやオペラに直接触れる児童たちに、オペラの魅力を伝えることを軸に進めていきました。大人しいクラスで、思うような反応がなかった場面もありましたが、アクティビティが進むにつれ、梅津さんの問いかけにも積極的に参加してくれました。事後アンケートでは、コロラトゥーラソプラノの歌声やラチェットを使って演出した曲が、特に印象に残ったようでした。

タイトル：ココロに響くクラシック
～魅力あふれるオペラの世界へようこそ～
期　　日：令和５年１月20日（金）　16：30 ～ 17：30
会　　場：株式会社西井製作所　食堂
参 加 者：50名

西井製作所は金属部品の製造を行う会社で、従業員は若い男性中心であることから、まずは音楽に親しんでもらえるような内容を軸に進めていきました。この会社では、週１回、勉強会を行っており、その時間をアクティビティに使わせていただきました。１曲目の演奏が始まった時、会場から驚きの声があがり、梅津さんの美しい歌声の響きや迫力に圧倒された様子でした。全員で手話を用いて参加する「きらきら星」では、手話だけでなく一緒に歌を歌う方も多く、積極的に参加されていたのがとても印象的でした。最後、「子どもを連れてコンサートに行きたい」と、声をかけてくださった方もあり、今回の目標である子育て世代を呼び込むということに、手ごたえを感じたアクティビティでもありました。

コンサート

タイトル：あなたのココロに届けたい！
ニューイヤーコンサートinかいた
期　　日：令和５年１月22日（日）　13：30 ～ 15：10
会　　場：織田幹雄スクエア　ホール
参 加 者：124名

ターゲットとした30 ～ 40歳代の子育て世代に聴きに来ていただきたいと、聴きやすい内容となるようにプログラムを相談しながら決めていきました。前半はオペラの中でも一度は聴いたことのある有名な曲や日本の曲を中心に進め、後半は梅津さんからの提案で、オペラの歌詞をプロジェクターに投影し、歌詞の意味を理解して聴けるように工夫しました。本格的な設備のない、普段は体育館として利用しているホールでのコンサートのため、リハーサルでは何度も立ち位置やピアノの位置を調整し、本番を迎えました。当町で声楽のコンサートを行ったのは初めてで、町民に受け入れてもらえるか不安ではありましたが、オペラの素晴らしさ、アーティストの魅力が来場者に伝わり、大盛況で終えることができました。

ホール担当者の意見・評価
所属：海田町教育委員会 生涯学習課　野村　典史

①　応募の動機・事業のねらい

会場となる織田幹雄スクエアは、老朽化した海田公民館を移転、新築する形で、令和２年４月に開館した当町では初めての公共ホールです。海田町に初めてできたホールを活用し、この事業を通して町民に音楽を楽しむきっかけづくりとしたいと考え応募をしました。

また、開館した令和２年以降は、新型コロナウイルス感染症の拡大により事業の中止が相次ぎ、予定した文化芸術活動を行うことができない時期でもありました。この事業を通して、町民に限らず多くの人に織田幹雄スクエアという施設を知ってもらい、普段、織田幹雄スクエアを利用していない方にも利用してもらうきっかけとしたいことも、もう一つの目的でした。

②　企画のポイント

織田幹雄スクエアを利用する人の大半は高齢者が占めています。その一方で、子どものいる割合が高い30 ～ 40歳代の利用は少ない状況です。これまで30年以上、当町で実施しているクラシックコンサート（弦楽四重奏）もありますが、観客の90％は50歳以上が占めています。また、かなり本格的なコンサートで、初心者が気軽に聴きに来られないことも課題でした。

利用の少ない30 ～ 40歳代の子育て世代を呼び込み、幅広い世代に利用してもらえる施設としていきたいという考えから、子育て世代に比較的なじみのある音楽を活用し、コンサートを行い、ホールの認知度を高め、新たな利用者を増やすことをポイントに企画を考えていきました。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

・ターゲットとする30 ～ 40歳代の子育て世代をいかに呼び込んでいくか、広報戦略のイメージがつきにくかったこと
・公民館の体育館とホールが併用となっている施設のため、普通の文化ホールのような音の響きが得られず、ステージ設営に苦慮したこと
・子育て世代の集客を目的としているにもかかわらず、親子室がコンサートに対応しておらず、親子連れの来場が難しかったこと
・自分自身がクラシックコンサートの運営を主担当で行うことが初めてで、企画立案から広報、そしてコンサートやアクティビティの実施と進行管理という、それぞれの業務を手探りで進めなければならなかったこと

④　上記③をどのようにクリアしたか

アクティビティの実施場所を学校のみとせず、子育て世代が就労している企業や普段仕事でコンサートに足を運ぶことが難しい社会福祉施設の職員を対象とし、高齢者以外の大人にも音楽に触れてもらえる機会をつくりました。

広報や宣伝については、町の広報紙とポスターやチラシの配布に加え、ターゲットとする世代の目に触れる機会を増やすため、ＳＮＳを多く用いたり、ＰＲ動画を作成したりしてデジタルコンテンツを積極的に使用しました。他にも、多くの目に触れるように、新聞への記事掲載の依頼、地元テレビ局の地域ＰＲコーナーでの宣伝など、多角的にコンサートの周知を図りました。

また、事業を進めていくうえで、わからないこと、不安なことは、積極的にコーディネーターやマネジメントと連絡を取り、どのように進めていくかを明確にしたうえで進めていくことを意識しました。

⑤　事業を実施しての成果

今回のコンサートのターゲットである子育て世代と多く接する機会がある場所はどこかという視点で、アクティビティ先の選定を行いました。アクティビティ先の業務の関係上、多くの人が参加することが難しい実施場所もありましたが、参加者の人数にかかわらず、歌声を聴いた人の満足度は高く、実施したアクティビティ先の一つでは、コンサートに子どもも連れて行きたいという声もあり、ターゲットとした世代へのＰＲになったのではと感じました。

結果的にコンサートは、観客の大半を高齢者が占めることになりましたが、毎年行っている弦楽四重奏のクラシックコンサートに比べ、学生や20～50歳代の来場者もあり、わずかながらも若い世代を呼び込むこともでき、手ごたえを感じました。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

・ターゲットとした子育て世代への周知が足りませんでした。特にＳＮＳの発信は海田町のFacebookとTwitter、会場である公共ホール（織田幹雄スクエア）のInstagramを活用し、これまでのイベント以上に力を入れましたが、コンサート後のアンケートを見るとＳＮＳを見て来場された方は０人でした。新聞や町の広報誌をあまり見ない子育て世代に対し、効果的な広報は何かを考える必要があると感じました。

・公共ホールが公民館の体育館と併用の施設ということもあり、通常の文化ホールと比べ、音響や照明設備、親子室の環境など不十分な点が多くありました。ただ、限られた環境の中でも、よりよいコンサートになるように、持っている資機材を十分に把握し活用することや、どのようにしたら音が響くようになるか研究していくことが必要と感じました。

　また、令和４年夏にグランドピアノの寄贈を受け、オーバーホールを行い使用できる環境が整いましたが、ホールは体育館としての利用がメインのため、グランドピアノを弾く機会がほとんどないことから、楽器がなじんでいない状態で、弾きにくいとの指摘を受けました。保有している楽器の管理についても、配慮する必要がありました。

・事業実施の際、アクティビティやコンサートの会場設営、公演時の演出に関わる調整やアーティストの動きの最終確認など、コーディネーターやアシスタントに頼り切りになっていたことが多くあり、段取がわからない部分がある中、自ら動くという意識が欠けていたと感じました。

　また、演奏のプログラムについても、アーティストの良さを伝えたいという思いから、取り入れたいと思った曲以外の部分については、演奏者任せになってしまいました。アーティストの良さを伝えたいということばかり意識し、自らコンサートを作っていくという点をもう少し考えるべきだったと感じました。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

海田町は様々な団体のコンサートが年間を通して行われ、文化芸術イベント等が盛んな地域です。そのため、コンサートに対する垣根が比較的低く集客がしやすい一方で、来場者は高齢者のリピーターが多く、新たな来場者を発掘していかなければいけないことが課題でした。

今回、ターゲットとした30～40歳代の子育て世代は、他の自治体でも集客に苦慮する世代で、コーディネーターからも難しいと聞いていましたが、海田町の目指す方向性としては、避けては通れないということで、「やってみよう！」という思いで進めていきました。

思うようにチケット販売が伸びず、思い悩むこともありましたが、「長い目で見ていく」というアド

バイスも得ながら、広く周知を図りました。そして、コンサートで多くの人が梅津さんの歌声に魅了されて、大盛況で終わった時には、手ごたえを感じました。

子育て世代の来場者数は少数となりましたが、他のコンサートに比べると、この世代の来場者数が多く、来場者の満足度もとても高い結果となりました。一方で、アクティビティやコンサートのアンケートには、今回のような事業を継続してやってほしいという意見が多くあり、子育て世代に対して、継続して働きかけていくことが必要であると認識しました。

今回の事業では、コンサートを初めて担当することもあり、不安な部分も多くありましたが、梅津さんや小埜寺さんのみならずコーディネーター、アシスタント、マネジメント、アクティビティ先の関係者の方々、海田町教育委員会の職員、一丸となり、一つのコンサートを作り上げることができました。全員が一つとなって、事業を作り上げることは大変でしたが、コンサートが成功し、海田町が一歩成長できたと感じています。今回の経験を活かし、今後もホールを活用した海田町らしいコンサートづくりに取り組んでいきたいと思います。

アシスタントレポート
桜井　しおり（ワークショップ・アーティストおとみっく共同代表、東京都文化会館ワークショップ・リーダー）

《はじめに》

本事業の“成功”とは一体なんなのだろうか。どのような意味を持った“成功”なのか。答えはもちろん１つではないのだが、私は、ホール担当者からの「おんかつ、大変だったけどやってよかったです」、そしてアーティストからの「またここに帰ってきたいです」が双方から聞こえることだと思っている。

今回担当した海田町での公共ホール音楽活性化事業(以下おんかつと記す)では、最終日にその言葉を聞くことが出来た。

広島県安芸郡海田町は、広島県の南西部に位置し、政令指定都市広島市と隣接しており、JR広島駅まで電車で９分という抜群のロケーションを誇っている。近年は人口も増加しており、特に合計特殊出生率が最新の公表数値では1.86という日本の平均を上回る勢いのある町である。また、1928年８月２日、第９回オリンピック・アムステルダム大会三段跳で、15m21cmの記録で優勝した織田幹雄さんの故郷でもあり、今回の本公演も織田幹雄記念館の複合施設である、織田幹雄スクエアで実施された。

アーティストはソプラノ歌手の梅津碧さん。アクティビティ先は、海田西中学校の吹奏楽部の生徒、特別養護老人ホーム花みずきのケアスタッフ、海田西小学６年生、株式会社西井製作所の職員向け、合計４ヶ所である。

《アクティビティ》

本事業担当者である、野村さん、田村さんが事前に細やかに共有くださったおかげで、４ヶ所とも我々を大変快く迎えてくださった。特に特別養護老人ホーム花みずきでの実施は、高齢者がいる施設の為、新型コロナウイルスの問題で少し気掛かりだったが、施設担当者の方からの「大変な仕事なので癒しの時間をつくって頂きたい」というお言葉も頂いたおかげで、無事実施する事ができた。７名のスタッフに向けたアクティビティという、とても小規模ではあったが、梅津さんのご家族のお話や近い距離で真っ直ぐに届く歌声に心を動かされた方も多く、武満徹作曲の小さな空では、全員が涙を流されていた。職業柄、人込みやコンサートに足を運ぶ事が難しい方々である。この施設を選ばれた野村さん、田村さんの素晴らしい選択であった。

梅津さんのプログラムは、自己紹介に始まり、歌手の身体的な特徴の説明、役を演じるオペラ歌手の仕事について、自分の夢を信じること。の流れに沿って構成されていた。クラシック音楽会では異色ともいえる経歴をもった梅津さんだからこそのお話が多く、対象者たちも大変熱心に耳を傾けていた。

《コンサート》

ホールでは年に一度、弦楽四重奏のコンサートを定期開催しており、そのコンサートの固定のお客様(高齢者が多いとのこと)以外の方に施設を訪れて欲しい、という担当者の願いのもと、対象者は子育て世代とその子どもたち(小中学生)と設定された。

オペラの世界を知って欲しい、楽しんでもらいたいというコンセプトのもと、前半はアリアや短めの曲を選曲し、後半はオペラ「こうもり」のハイライトver.を40分程度にまとめたプログラムで構成された。後半の「こうもり」ハイライトver.は完成度も高く、スクリーンやプロジェクター、小道具も使った凝った演出も入っており、多くのお客様にご満足頂けたようであった。一般的にオペラはチケット代も高く、上演時間も長いため、オペラ愛好者でないと中々手が出しにくい懸念点を見事に払拭した内容であった。

客層については、高齢者の割合は多かったものの、アクティビティ先の対象者や比較的若い層も目立っていたので、当初の目的は果たせたのではないだろうか。

《さいごに》

冒頭に記した通り、今回のおんかつは全てが大変スムーズに進行したのだが、それは何故か？私は担

当者お二人が持つ、“町への客観的な視点と町への溢れる愛情”と考えた。アクティビティ先の選択やコンサートの対象者の決定、いわゆる事業の外枠を決める際、どれだけ自分の町を理解しているかがとても重要なポイントになる。お二人はその部分が大変明確だった為、アーティストは自分の音楽の何を町に届けたらよいのかを理解し易かったと思うし、その対象者それぞれにマッチしたプログラムを提供できていたと思う。

課題はこれを継続させていくこと。さらに多くの年齢層や客層に届ける為に、広報方法の模索やコンサートの頻度等、次につながる話も担当者お二人から挙がっていた。今回はその第一歩として、一石を投じられたのではないだろうか。

実施団体：公益財団法人丸亀市福祉事業団
実施時期：令和５年１月27日（金）～令和５年１月29日（日）
出演アーティスト：石上　真由子（ヴァイオリン）　北端　祥人（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：石上真由子ミニコンサート
期　　日：令和５年１月27日（金）　11：10 ～ 11：50
会　　場：丸亀市立栗熊小学校　音楽室
参 加 者：３，４年生　47名

【概要】地域の子どもたちの豊かな感受性を育む機会、音楽科教育を補完する機会(３年生の教科書からヴァイオリンが登場する)、舞台芸術の魅力に出会う機会として実施。【模様】演奏の迫力に引き込まれるように鑑賞していた。曲間の対話の場面でも積極的な発言が続き､その発言から､想像力を働かせながら作品を鑑賞したり､ヴァイオリンが奏でる多様な音色に興味を持って鑑賞する姿勢の萌芽が読み取れた。

タイトル：石上真由子ミニコンサート
期　　日：令和５年１月27日（金）　14：00 ～ 14：45
会　　場：丸亀市立栗熊小学校　音楽室
参 加 者：５，６年生　44名

【概要】地域の子どもたちの豊かな感受性を育む機会、音楽科教育を補完する機会(ヴァイオリンとピアノを用いた鑑賞の項目がある)、舞台芸術の魅力に出会う機会として実施。【模様】演奏が生み出す様々な空気感に反応しながら食い入るように鑑賞していた。曲間の対話の場面での積極的な発言の数々から、想像力を働かせながら作品を鑑賞したり、ヴァイオリンの様々な演奏技法とそこから生まれる表現に興味を持って鑑賞していることが読み取れた。

タイトル：石上真由子ミニコンサート
期　　日：令和５年１月28日（土）　11：10 ～ 11：50
会　　場：丸亀市立綾歌中学校　音楽室
参 加 者：綾歌中学校吹奏楽部、飯山中学校吹奏学部　30名

【概要】地域で演奏活動をする子どもたちが音楽的表現の多様さや奥深さに触れる機会、舞台芸術のもつ魅力を掘り下げて感じることのできる機会として実施。【模様】演奏の多様な表現に感動するとともに、目を凝らして演奏する姿を観察していた。曲間の対話や質問の場面における発言から、表現者としての姿勢を学んだり、今回の経験を自分たちのこれからの活動に活かそうとする意欲を読み取れた。

タイトル：石上真由子ミニコンサート
期　　日：令和５年１月28日（土）　15：00 ～ 15：40
会　　場：丸亀市市民交流活動センター　マルタス　交流スペース
参 加 者：マルタス来館者　104名

【概要】日常的に地域の親子、学生、年配の方などが利用している本会場の特性を利用し、幅広い層の市民に生の舞台芸術の魅力に触れる機会を創出する目的で実施。【模様】大人だけでなく、乳幼児、子ども達、学生なども演奏に終始集中して鑑賞していた。拍手、トークの反応、終演後に聴こえる会話から、ヴァイオリン、ピアノ、クラシック音楽の魅力にはじめて触れたり、大きな感動、心の癒しや活力などを得る機会となっていたことが読み取れた。

コンサート

タイトル：石上真由子ヴァイオリン・リサイタル
期　　日：令和５年１月29日（日）　14：00 ～ 16：00
会　　場：丸亀市綾歌総合文化会館　大ホール
参 加 者：来場者　237名

【概要】幅広い年齢や属性の市民に本格的な生の舞台芸術を体験する機会を提供することを目的として実施。【模様】開演から終演まで来場者の集中力が非常に高い空気感であった。来場者のおよそ半数の方が本公演のような内容未体験者であった。アンケート回答内容や終演後の会話などから、ホールでの生の舞台芸術の体験だからこその感動や、心の癒しや活力などを得る機会となっていたことが読み取れた

ホール担当者の意見・評価
丸亀市福祉事業団文化事業部　馬場　修司

①　応募の動機・事業のねらい

【応募動機】“おんかつ”を通し、公共ホールによる文化事業の本来的役割を果たしていくために必要な考え方や具体的手法、地域性を踏まえた事業実施に必要なプロセスを学ぶとともに、今回アプローチする対象にその本来的役割が有する効果を届けるため。【事業のねらい】アクティビティと公演ともに、できる限り地域の多様な方々との対話的プロセスのもと準備を進め、その動きを地域の文化的コモンズ形成の端緒の一つとして位置づける。

②　企画のポイント

1．企画の段階から(実施会場の決定に関しても)地域の多様な方々との対話的プロセスを経ることを指向する。
2．アクティビティ、公演ともに“おんかつ”の目的、ねらいとともに、本市の文化芸術基本計画に基づいて企画する。
3．公演においては、本ジャンルの舞台芸術を愛好している方々とともに、これまで本ジャンルにあまり接する機会のなかった方々に興味をもってもらい、足を運んでもらえるような工夫をおこなう。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

アクティビティ④において、会場の特徴(ねらいを実現するために最適な多様な方々が行き交う場であると同時に雑音が多い)が本ジャンルの魅力を十分に届けるために最適な環境とはいえず、会場づくりに苦労した。

④　上記③をどのようにクリアしたか

現地での研修にて、コーディネーターの丹羽様が前記問題点について重要なポイントを教えてくださりながら、本会場における最適な場所を見つけて下さった。その場所については施設管理上実施が難しいと考えられる点もあったが、会場管理者と打ち合わせを重ねて問題点を解消し、実現することが出来た。

⑤　事業を実施しての成果

①企画段階から地域の方々との対話的なプロセスを経ること。②地域の子どもたちの豊かな感受性を育むこと。③地域の様々な属性の方々に生の舞台芸術の魅力を届けること。など、“応募の動機”“事業のねらい”として挙げたすべての項目について、これからの弊団の事業を展開していくためのケーススタディとなる高いレベルでの成果を生むことが出来た。研修前からのアドバイス、研修における学びのおかげです。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

公演において、“事業のねらい”や“企画のポイント１．および２．”に基づく動きに想定より時間がかかり、告知とチケット販売日が当初目標の公演３カ月前よりも遅れて２か月前となったこともあり、来場者数について悔いが残った。前記の企画プロセスは、今後の本市における文化事業実施に不可欠なものなので、今回の学びを活かして企画プロセスそのものをブラッシュアップしていきたい。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

公共ホールによる文化事業の本来的役割や、文化芸術の本質的価値や社会的価値をすべての市民に届けるという本市並びに弊団の目的に関して、事業実施中の対象者の様子や公演後アンケート、事後の地域の諸関係者への聞き取りから、改めて地域づくりにおけるその必要性や効果について具体的に実感することが出来た。ホールの座席をすべて活かすことができる事業は、今回のような事業を継続的に続けていくことによって実現が可能になっていくと感じた。

アシスタントレポート
古橋果林（音楽ワークショップ・リーダー／ファシリテーター　東京藝術大学　国際芸術創造研究科　教育研究助手）

丸亀市は香川県中西部に位置する人口約10万人の、高松市に次ぐ第二の中心都市である。今回の“おんかつ”の舞台となったのは丸亀市綾歌総合文化会館、通称アイレックス。アイレックスは「人と文化の新しい出会いが行き交う地域発展のコミュニケーションスペース」として、1996年に開館したホールである。客席1,086席の多目的大ホールは音響効果も優れる開放的なホールだ。丸亀市では2024年に開館を予定している新市民会館「（仮称）みんなの劇場」の整備が進められており、アイレックスは新しい劇場との棲み分けの中で公共ホールとしての役割や事業のあり方を今一度模索する局面にあった。希望したアーティストはヴァイオリンの石上真由子さん。石上さんがヴァイオリンに抱く「かっこいい」という想いに強く共感した担当者は、子供から大人まで様々な人々にヴァイオリンの魅力を届け、生演奏に触れる感動体験を届けたいという想いから「ヴァイオリンはかっこいい！」という言葉をキャッチコピーとしてコンサートを制作することとなった。

アクティビティでは栗熊小学校の中学年及び高学年、綾歌中学校及び飯山中学校吹奏楽部、丸亀市市民交流活動センター「マルタス」の３箇所計４回のプログラムが組まれた。小学校及び中学校では先生方が非常に協力的で児童、生徒の様子を事前に細かく把握でき、アーティストにとってもプログラムの構成やトーク内容を検討する一助となっただろう。アクティビティごとにプログラムやトーク内容ついて、コーディネーターとアーティストでその都度検討を重ね、対象によって臨機応変に内容を変更し、回を重ねるごとにより充実したプログラムを届けることができた。迫力ある演奏で始まる冒頭では子どもたちの目の色が一瞬で変わり、引き込まれていく様子が見られた。また、様々な奏法を紹介しながら演奏される石上さん自身の編曲の「ハッピーバースデー変奏曲」では聞き馴染みのあるメロディが、初めて見るダイナミックな演奏方法で変化していく様子に子どもたちは興味津々だった。

マルタスでのアクティビティでは事前に申込受付を設けず、観客の人数、年齢層などを正確に把握することのできないオープンスペースでの実施となった。またアクティビティの開催場所についても一筋縄ではいかず、「普段クラシック音楽に触れることのない方々に、気軽にヴァイオリンの演奏を聴く機会を届けたい」というアイレックスの担当者の想いと、演奏に適した環境の確保や施設としての動線の確保等、相容れない部分も多く、苦戦する場面もみられた。結果としてなんとか着地点を見つけることができ、想定していたよりも多くの観客が訪れ、土曜日の午後にヴァイオリンの音色に耳を傾ける人々で賑わった。コンサートやアクティビティを実施する際に、果たしたい目的は企画する側の想いだけでは実現は難しい。今回のマルタスでのアクティビティのように、様々な側面においてクリアしなければならない課題は生じるものであり、それらを連携先の人々と密にコミュニケーションをとりながら、より良い着地点を探していくしかないだろう。

最終日に実施されたコンサートはチラシに大きく書かれたキャッチコピー「ヴァイオリンはかっこいい！」の文字通り、本格的なヴァイオリンの名曲が並ぶ充実のプログラムとなった。石上さんの熱い想いが詰まったトークも、アクティビティを経て磨きがかかりとても良いテンポで聴衆を惹き込ませていた。

一方で少し残念に思われたことは、今回のおんかつ事業を通して“丸亀らしさ”というものが見えにくかった点である。事業の企画を考える際に、「何を目的に」、「誰に対して」、「何を届けるか」を考えることが重要であることは言うまでもない。しかしながらその一つ一つが具体性に欠けるものだと、コンサート全体がぼんやりとしてしまうことがある。おんかつ事業は様々な関係者が関わることで、様々な立場・観点から企画を検討し、実施のための準備を進めることができる。つまり、様々な立場の人々が様々な角度からの意見を出し合うことで、唯一無二の魅力的な事業が生まれていくと言えるだろう。そして事業を実施するその場所の“地域らしさ”というものを最も良く引き出せるのは、その土地をよ

く知る担当者ではないだろうか。「地域らしさ」とは何か。この問いは場合によっては容易に答えが導き出せるものではないかもしれない。丸亀の皆さんには、今回のおんかつ事業での経験を糧にしながら、“丸亀らしい”、“丸亀で聴きたい”、“丸亀でしかできない” 事業は何か、今後も模索しながら是非事業を続けていただきたい。

実施団体：公益財団法人佐世保地域文化事業財団
実施時期：令和５年２月２日（木）～令和５年２月４日（土）
出演アーティスト：石上　真由子（ヴァイオリン）

アクティビティ

タイトル：石上真由子ヴァイオリンコンサート　～私と音楽～
期　　日：令和５年２月２日（木）　13：45 ～ 14：30
会　　場：アルカスSASEBO　第２リハーサル室
参 加 者：佐世保市立看護専門学校１年生　32名

演奏家と対象者との間に「医療」という共通点があることから、普段クラシック音楽に馴染みのない学生でも興味関心を持ちやすいのではないかとの狙いもあり、看護専門学生を対象に実施。初めてのターゲット層でどのような反応が起こるか不安もあったが、目の前で奏でられる音楽に惹き寄せられるように見聴きしている姿を見て、実体験がもたらす感動の大きさを改めて思い知った。

タイトル：石上真由子ヴァイオリンコンサート　～私と音楽～
期　　日：令和５年２月２日（木）　15：00 ～ 15：45
会　　場：アルカスSASEBO　第２リハーサル室
参 加 者：佐世保市立看護専門学校１年生　35名

１回目と同内容で実施。“演奏家も音楽の世界も特別ではない”ことを知り親近感を持ってもらうため、演奏家にはMCに自身の経験談を交えて欲しいと依頼した。「医療ではなく音楽の道を選択した理由」「医療も音楽も相手に耳を傾ける姿勢が大切であること」、自分と共通点のある演奏家の話は音楽と共に学生たちの心に刻まれたようで、演奏家と聴き手の思いが通い合う様子が印象的なアクティビティであった。

タイトル：石上真由子ヴァイオリンコンサート　～私と音楽～
期　　日：令和５年２月３日（金）　13：00 ～ 13：45
会　　場：相浦コミュニティセンター　講座室７
参 加 者：長崎県立大学佐世保校学生ほか　９名

学生の参加が１名、全参加者数も少なかったことが心残りではあったが、その分心の距離が近くコミュニケーションの密度の濃さを感じる時間となった。１日目同様、演奏家の経験談を交えたMCにより、「音楽家は自分とは違う世界の人だと思っていたが親しみを感じた」と狙いどおりの感想をもらえたことは大きな収穫である。学生以外の参加者にも楽しんでいただけ、様々な方にホールの取り組みを知っていただく有意義な機会となった。

タイトル：石上真由子ヴァイオリンコンサート　～私と音楽～
期　　日：令和５年２月３日（金）　18：00 ～ 19：00
会　　場：相浦コミュニティセンター　講座室７
参 加 者：長崎県立大学佐世保校学生ほか　６名

３回目と同内容で実施し、コーディネーターの提案で終了後にアフタートークの時間を設けた。人数が少ない環境を活かして一人ずつ感想を述べてもらったが、普段の演奏会では滅多にない“演奏家に直接想いを伝える機会”に、どの参加者も時間が足りなくなる程熱心に気持ちを伝えていた。全４回のアクティビティを通じて、地域の人々に感動体験を届けることができ、そしてその成果を光景として感じられるような時間であった。

コンサート

タイトル：Fantastic Violin ！石上真由子とヴァイオリン
期　　日：令和５年２月４日（土）　14：00 ～ 15：00
会　　場：アルカスSASEBO　中ホール
参 加 者：312名

主対象がコンサート初心者であることから１時間の公演としたが、曲目を本格的なクラシック作品とすることで既存の聴衆も満足できる内容とした。開場中に演奏家が来場者を出迎える場を設けたことで、コンサート前に聴衆との距離を一気に縮めることができた。現代曲の演奏後には笑いが起きるほど和やかな空間に本格的な演奏と人柄が感じられるMCで、狙いどおりヴァイオリンのカッコよさと音楽の素晴らしさが伝わる公演となった。

ホール担当者の意見・評価
アルカスSASEBO事業課　山元　麻美

①　応募の動機・事業のねらい

ホール開館から22年を迎え公演以外にも様々な事業を行ってはいるが、アウトリーチに関しては、活動実績はあるものの専門的な知識を有した職員はおらず、人材育成がひとつの課題であると感じていた。おんかつを実施することで、得た知識や経験を日頃行っているアウトリーチ活動に活用し充実を図るとともに、アウトリーチ活動を行っている地元演奏家にそのノウハウを還元することで彼らの活動支援にも繋がり、結果、地域の文化拠点としての公共ホールの役割を果たしていくことができるのではないかと考えた。

②　企画のポイント

研修で学んだサイレント・パトロンという言葉にヒントを得て、アクティビティは「ホールの存在や活動を知っていただくこと・ホールと地域の結びつきを高めること」を目的のひとつに掲げ、アルカスSASEBOとしては初めての試みとなる将来の佐世保を担う大学生・専門学生を対象に企画した。クラシック音楽初心者をメインターゲットとしたコンサートでは、高貴さ・特別感といったクラシック音楽に対する敷居の高さを払拭するため、「ヴァイオリンのカッコよさ」を一本軸に据え、従来のコンサートのイメージにとらわれない新しい視線を常に心がけた。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

・アクティビティのターゲットとした大学や専門学校の校内にはピアノがなく、またピアノをレンタルできるあても見つからず、対象と環境のどちらを重視するのか判断に迷った。
・大学生とともに、当初アクティビティのターゲットとしていた地元商店街に関しては、ホールとの信頼関係がまだ築けていない状況であり、商店街の人々の環境を自分たちが理解できていなかったこともあり、調整に時間を要し、かつ実施までたどり着くことができなかった。
・長崎県立大学佐世保校でのアクティビティ参加者は学年や専攻を限定せずに公募としたが、時期的な問題もあり参加者が集まらなかった。集団（クラス）単位ではない対象へのアプローチの難しさを実感した。

④　上記③をどのようにクリアしたか

・対象者のもとへ出向く形にこだわり無伴奏での実施も考えたが、コーディネーターのアドヴァイスを参考に、対象に「何をどう感じて欲しいか」を最優先し判断した。専門学校についてはホールと学校が近い場所にあったためインリーチという形で対応し、県立大学については大学の向かいに市の公共施設があったことから、その環境を活用することで問題を解決できた。「アウトリーチ＝出向く」という概念にとらわれすぎていたが、柔軟に広い視野で考えることで、様々な選択肢を持つことができるとの学びを得られた。
・今後の課題としてとらえることで、今回の経験を無駄にしないよう気持ちを切り替えた。代わりに個別に商店街の店舗を回りコンサートの案内を行ったりポスター掲示の協力を仰ぐなど、まずは個々と関係性を築くことから取り組んだ。課題を見つけることができ、そしてその解決への一歩を踏み出せたことは、思いがけない収穫であった。
・他大学の学生へも募集をかけ、ある程度の人数を揃えることも考えたが、「ホールの存在や活動を知っていただくこと・ホールと地域の結びつきを高めること」という目的を重視し、大学の教職員や市役所の文化関係部署、佐世保市文化振興委員会（市の文化芸術に関する意見交換や検討を行っている委

員会）など、地域文化のキーパーソンとなる方に声をかけた。実際、参加者はとても少ない人数となったものの、対象や参加人数にこだわりすぎず本来の目的達成を第一に考え判断したことで、内容の濃いアクティビティにすることができた。

⑤　事業を実施しての成果

当初はホールが行っている小学生向けのアウトリーチ事業へ還元できる経験の場とするため、小学生を対象とした内容でのアクティビティを考えていたが、研修会で「新しい対象でチャレンジすることで得られる経験もある」とのアドヴァイスをいただき、これまで取り組んだことのない大学生を対象に実施した。ホールとしても若年層の取り込みは大きな課題であり、常に解決の糸口を模索している状況において、今回のおんかつで若い世代が音楽に直に触れる機会を創れたこと、そしてアクティビティを体験した学生たちが「感動した」「この魅力を他の人にも伝えたい」と感想を寄せてくれたことは何よりも嬉しかった。また「今まで音楽は全く別の世界だと思っていたが、文化と自分たちが学んでいる地域創生は繋がることができるのではないかと感じた」と、我々が思い描く文化と地域の未来を同じように見出そうとしてくれている学生がいることに希望を抱くこともできた。加えて大学の教職員や文化芸術に関わる地域の人々と今回の体験を共有し、ホールの活動を知っていただく場を設けられたことは、今後の事業の大きな後押しとなるのではないかとも期待している。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

今回のおんかつで最も悔やまれる点は、長崎県立大学佐世保校の学生を対象としたアクティビティにおいて、学生の参加者が少なかったことである。窓口になっていただいた教職員の方への信頼と安心もあり募集に関する一切を学校側に任せてしまったが、事前に学生の興味関心を下調べするなど、ホール側で何かできることがあったのではないかと反省している。また、実施時期を決めるにあたり、コンサート会場と希望する演奏家のスケジュールを確保できるかが初めの大きな課題であったが、自分たちの都合を優先したがゆえ、大学のテスト期間とアクティビティの日程が重なってしまうという状況を生んでしまった。アクティビティとコンサートの全てにおいて好条件を整えることは大変であるが、事前のリサーチを十分に行っていれば回避できた可能性もあるため、反省点として今後に活かしていきたい。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

これまで独自に行ってきたアウトリーチ活動はアウトリーチを実施すること自体が目的となっており、「何のためにアウトリーチをするのか」「アウトリーチを通して何を伝えたいのか・何を感じてもらいたいのか」、その先の目標を定めることができていなかった。今思い返すと一方通行のアウトリーチであったと反省したとともに、それができていない理由はホールと地域の関り方について将来像を描けていないことが大きな原因であると深く考えさせられるおんかつ体験であった。

令和４年度から市が行っていた文化事業の多くが財団に移管され、佐世保市における文化事業のほとんどを財団が担っていくこととなったが、その内容は公演やアウトリーチのみならず、市民の文化活動支援や地域文化資源の活用、地域文化の発信と広範囲に及ぶ。嬉しいことに、今回のおんかつではアクティビティを通じてホールの取り組みを理解してくださる方々と出会え、コンサートをきっかけに初めてホールに足を運んでくださるが方いた。この経験を一度で終わらせず、おんかつで生まれた繋がりを紡ぎ広げていくことで、今、アルカスSASEBOが公共ホールとして求められている役割を果たしていけるのではないかと考えている。

アシスタントレポート
山路　順子（公益財団法人立川市地域文化振興財団 文化事業係）

九州の北西端で長崎県北部に位置する佐世保市。かつて旧海軍の軍港として栄えた歴史をもち、今は米海軍基地を有する国際色豊かな港街であるほか、島の密集度が日本一といわれる多島海「九十九島」、日本最大級のテーマパーク「ハウステンボス」、日本一の長さを誇るアーケードに位置する商店街など、活気あふれた観光都市としても知られています。

今回おんかつを実施した「アルカスSASEBO（以下、アルカス）」は、2,000席の大ホールから350席のイベントホール、会議室、茶室、館外の共有スペース・アルカス広場等を有する複合施設です。設置者は長崎県と佐世保市の２者によるもので、この施設を（公財）佐世保地域文化事業財団が指定管理者として運営、年間を通して自主事業も積極的に行っています。

担当の山元さんは、鑑賞公演のほかにも、音楽アウトリーチ事業の演奏家研修業務を担当されており「自らおんかつを経験して知識を還元することで地元演奏家の活動支援に繋げたい」という想いがあり応募されました。出演アーティストはヴァイオリンの石上真由子さん。４月の全体研修会におけるプレゼンテーションにて、お話と演奏に強い感銘を受け、石上さんにお願いする運びとなりました。

《アクティビティ》

まず、将来のホールの応援者を増やしたいという考えから、市内の大学生に狙いを定めました。１日目は、佐世保市立看護専門学校の１年生２クラスを対象に、徒歩圏内のアルカスに来てもらうインリーチ形式。２日目は、長崎県立大学佐世保校を対象に同校の広報課を通じて公募の形を取り、大学の真向かいに位置する相浦地区コミュニティーセンターで実施しました。

医師免許をお持ちの石上さんが、医師を目指したきっかけやヴァイオリンとの出会い、音楽を選択するまでの葛藤や現在に至るまでなど、美しくも説得力のある音色と共に、石上さんの歩んだ人生に耳を傾けました。学生の皆さんにとって、今は社会人を目前にした大切な時期ですから聴く姿勢は真剣そのもの。静かながらもじっと集中して頷く様子をたくさん見受けられたのが印象的でした。

「アーティストとの交流の時間を設けたい」という県立大学側からのアイディアを受け、最後のアクティビティ後にアフタートークを実施。進行をスマートにするため、参加者に対して事前に質問を募り、質問に対して石上さんが回答をしたり、参加者が各々の感想を共有したり、大変興味深い時間を過ごしました。残念ながら県立大学の集まりは芳しくありませんでしたが、人数が少ない分、しっかりと一人ひとりの目を見て会話ができる、大変密度の濃いものとなりました。回収していただいたアンケートには「生の演奏を間近で聴いて感動した」「また聴いてみたい」という声で溢れ、学生の皆さんもクラシック音楽を存分に楽しんでもらえたことを実感できたアクティビティとなりました。

《コンサート》

コンサートでは新たなターゲット層を開拓したいという想いから、クラシックコンサート初心者をメインターゲットに設定し、MCを織り交ぜつつもクラシックファンにもお越しいただけるよう本格的なプログラムで実施しました。気軽に足を運んでいただけるよう、休憩なしの60分プログラムでお求めやすい価格に設定するなど、普段の事業との差別化にも考慮されました。ホールに足を運ぶまでの不安を取り除く工夫として、チラシの裏面に「チケット購入方法」から「公演当日」に至るまでの流れを、職員の元気で明るいジェスチャー写真と共に説明を入れ、おもてなし溢れた紙面を提供。また、アルカスの多彩な取り組みを知っていただくために、プログラムの一角に「ジュニアオーケストラ＆アカデミー」や「ホールボランティアSAV（Sasebo Arkas Volunteer）」「音楽アウトリーチ事業」の紹介も入れました。コンサートタイトルは『Fantastic Violin ！ 石上真由子とヴァイオリン』。石上さんが感じる「ヴァ

イオリンのかっこよさ」が結びつくようにと題されました。

開場中には数分程度、石上さん自らお出迎えを行うサプライズを実施しました。これには来場された皆さんは本物の石上さんを目の前に一瞬驚きながらも笑顔を返したり手を振ったり、親しみに満ちたコミュニケーションを取りあいました。開演までのワクワク感がぐっと高まったことと思います。開演後は、石上さんの和やかなMCと共に、ホールならではの響きや迫力、息づかいなどを存分に感じ、音楽に浸れるひと時となりました。

《最後に》

このおんかつは山元さんのほか、古賀さんと川村さんにもご担当いただきました。皆さんが佐世保市の文化振興に対してとても熱心で、新しい挑戦にも取り組み、それぞれが今持っている知恵を合わせて最大限に力を発揮してくださいました。コンサート終演後は、お客様も石上さんもピアニストの城さんも幸せいっぱい。山元さんたちの心からの「楽しかった」という言葉と薄ら滲んだものを見て、アルカスの未来が益々明るく見えてきました。きっと山元さんたちは何か手ごたえを得たのではないかと思います。これからも「アルカスSASEBOだからできる」自主事業を更に展開・発信してくださることを、心より期待しております。そして、改めて関わった全ての皆様へ心より感謝申し上げます。

実施団体：宇佐市院内文化交流ホール30周年記念事業実行委員会
実施時期：令和４年10月21日（金）～令和４年10月23日（日）
出演アーティスト：新野　将之（打楽器）　富田　真以子（打楽器）

アクティビティ

タイトル：宇佐市院内文化交流ホール30周年記念事業／
南院内・院内中部小学校（３時間目）
期　　日：令和４年10月21日（金）　10：40 ～ 11：25
会　　場：院内中部小学校　中部っこルーム（１階）
参 加 者：５・６年生　24名

当日は、初の宇佐市でのアクティビティであったため、生徒も新野さんらも緊張を交えつつの開始となった。子供たちの参加を考慮したアクティビティであったが音楽から取り入れる子供たちの発想力が凄まじく、演奏を聞き子供たち自身で考えて絵に表現する時間は、想像よりも時間を要す結果となったが、子供たちも演者も一緒になって盛り上がれる時間になったと考える。

タイトル：宇佐市院内文化交流ホール30周年記念事業／
北部小学校
期　　日：令和４年10月21日（金）　14：30 ～ 15：15（６時間目）
会　　場：院内北部小学校　音楽室（３階）
参 加 者：５・６年生　27名

当日は、３階の音楽室で背景に地元の景色も取り入れてのアクティビティとなった。ここでも子供たちの自主性や音楽に向き合う姿勢に若干私たちが圧倒されつつも、自分の意見を発表する場や生徒間で共有する場を設けることによりただ演奏を聴くだけでなく、身近な音楽に自ら歩み寄るいい機会になったと考える。生徒たちの元気やその主体性に新野さんらも感動するアクティビティとなった。

タイトル：宇佐市院内文化交流ホール30周年記念事業／
院内童龍太鼓
期　　日：令和４年10月21日（金）　19：00 ～ 19：45
会　　場：宇佐市院内文化交流ホール
参 加 者：11名

当日は、楽器紹介を少しした後、演奏を一緒に行うことをメインでアクティビティが行われた。言葉を介さずに、音やリズムのみでコミュニケーションをとる事は、童龍太鼓さんにとってなかなかない機会で、自分の感性をリズムに乗せて表現する姿は、緊張感がある中でもとても生き生きとしており自身の音楽性や童龍太鼓の演奏にかなりいい効果をもたらすのではないかと考える。

タイトル：宇佐市院内文化交流ホール30周年記念事業／
宇佐のマチュピチュ展望台
期　　日：令和４年10月22日（土）　10：00 ～ 00：30
会　　場：宇佐のマチュピチュ展望台
参 加 者：20名

当日は、まちづくり協議会の方に加え観光客の方もアクティビティに参加してくださり屋外の雰囲気を存分に生かしたアクティビティとなった。新野さんも人生初めての屋外コンサートであったこともあり、新たな感覚や屋外の音の響きに興味を持っていただき、まちづくり協議会の方も新たな土地の魅力に気付いていただけた屋外アクティビティとなった。

コンサート

タイトル：宇佐市院内文化交流ホール30周年記念事業
期　　日：令和４年10月23日（日）　15：00 ～ 16：30
会　　場：宇佐市院内文化交流ホール
参 加 者：121名

当日は、たくさんの来場者の参加のもとコンサートを開催できた。前半の新野さんと富田さんのパーカッションコンサートは、来場者参加型のコンサートであった為、たくさんの方が音楽に「参画」することでとても盛り上がりを見せていた。後半の童龍太鼓さんとのコラボでは、普段なかなか目にすることのできない新野さんの姿や、童龍太鼓と一生懸命「音」について語り合う姿はとても感動的なものとなった。

ホール担当者の意見・評価
所属：院内支所　地域振興課　桐畑　樹大

①　応募の動機・事業のねらい

宇佐市院内文化交流ホールが30周年を迎えるにあたり、院内地域に拠点を置く様々な団体と協力しながら記念事業を盛り上げる。また、地域の方々にプロの演奏を身近に感じて頂き、今後の地域活性化や文化交流ホールの利用促進に繋げること。

②　企画のポイント

打楽器奏者新野氏と院内地域で活動している院内童龍太鼓とのコラボ

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

コンサート等の開催経験が経験が乏しいことから、スケジュール調整や様々な事案を確認しながら進める必要があり、また、コンサート等に足を運ぶ機会が少ない地域での集客の難しさを痛感した。

④　上記③をどのようにクリアしたか

コーディネーター・アシスタント・地域創造にサポートを頂きながら進めることができた。

⑤　事業を実施しての成果

新たな文化交流ホールの一面や、普段なかなか関わることのできないアーティストの方々との出会いや、そこにたどり着く過程で関わってくださった関係者の方々との出会いによって、様々な視点からの「ホール」との向き合い方に、また、人々やその地域とのかかわり方を学ぶことができた。特に人との関わりという面においては、今回「音楽」というテーマを基に人それぞれの考え方や、価値観、その地域に根付く思いに触れることができた。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

コンサートなどのイベントを開催するうえで、自身の広報発信力の未熟さを実感するとともに、普段の交流ホールの維持管理や運営方法の創意工夫について考える場面があった。今後のイベントの開催やホールの貸し出しの際には少しづつ改善しながら運営に取り組む。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

「町」については、音楽という文化に積極的に向き合う人が想像以上にいるという実感がわいた。また、コロナ禍により多くの各種行事が制限される中、やはりイベントを心待ちにしている人が多いと実感した。「ホール」については、今まで私の知らなかった院内文化交流ホールの魅力について知ることができた。故に、30年間培ってきた歴史を大切にしながらも、新たな歴史という意味でも自身を含めて外部の人にも、また地域の人にももっと利用していただけるような、院内町の人が集まる場所にしていきたいと考える。

アシスタントレポート

栄　咲季（公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化会館 事業企画課 事業係）

〈はじめに〉

大分空港から海沿いを走り、山の中を抜けると人口約53,000人の大分県宇佐市に到着する。市の中心地から少し離れ、山々に囲まれた自然が美しい土地が院内地域である。町のあちこちに石橋がかかり、その数なんと75基以上もあるとのこと。渓谷に人々が住んできた歴史がうかがえる。

今回おんかつを実施するのは宇佐市院内町交流文化センターという院内地域内にあるホールである。おんかつとしては令和3年度に実施予定であったが、様々な要因により延期となり、今年令和4年度の事業として実施することとなった。アーティストについても前年度からの踏襲とし、打楽器奏者の新野将之さんにお願いした。

前年度との違いは、令和４年度は宇佐市院内町文化交流ホールの30周年という記念事業の一環としておんかつを実施する点である。30周年記念事業は10月24日(日)に一日を通して行われることが決まっており、午前の部では記念式典と落語の独演会を、午後の部では新野さんのコンサートを行うことが予定され、新野さんと地元の和太鼓演奏団体「院内童龍太鼓」との共演も希望されていた。アクティビティを含め、記念事業の枠組みの中でおんかつを実施するということで、どのようなことをおんかつのメッセージとして残せるかがポイントとなった。

宇佐市おんかつのチームは、院内文化交流ホールからは長く職員をされている真川さんと新卒の桐畑さんのペア、新野さんの共演者として富田真依子さん、地域創造からコーディネーターの山本若子さん、職員の前田さん、アシスタント榮というメンバーで実施した。

〈アクティビティ〉

アクティビティは院内中部小学校と北部小学校のそれぞれ5、6年生たち、地域の小学生から高校生までが所属している和太鼓演奏団体「院内童龍太鼓」の子どもたち、そして観光スポット「宇佐のマチュピチュ展望台」に併設されている屋外市場「天空の市」を運営している南院内さとづくり協議会の方々を対象に実施した。

小学校では、様々な打楽器の紹介を中心に演奏をした。子どもたちがマリンバの楽曲を聴いて曲のタイトルを自由に考えるワークでは、曲を聴いた後の素直で自由な感性が各々のタイトルに表されていた。とにかく音楽を真正面から受け取ってくれる子どもたちだったので、新野さんも気合いが入り、音楽を通して対話する様子に胸が熱くなった。

マチュピチュ展望台「天空の市」でのアクティビティは、当日は気持ちの良い秋晴れの中での演奏となった。

「天空の市」で地元の特産品を販売する協議会の方々に向けての演奏だが、営業時間中の開催であるため、協議会の方々は一般のお客様の対応もしなくてはならなかった。事前の打ち合わせでは、このアクティビティを演奏イベントとしてではなく、音楽を通してどのようなことを協議会の方々に届けたいかについて考えた。大分の大自然を背景にし、地域のお買い物の場で演奏させていただいたことで、大分・自然・人々の生活・音楽に耳を傾けていただく特別な空間を共有できた。

童龍太鼓の子どもたちとのアクティビティでは、最終日のコンサートでの共演に向けて音楽を一緒に作り上げることをしたいとの新野さんのアイディアで、即興演奏「ドラムサークル」に参加してもらった。

ドラムサークルは、一つの円になり、太鼓をたたき合う即興の音楽である。新野さんが自宅から持ってきた様々な種類の太鼓を１人一つずつ渡し、はじめは新野さんの指揮や合図に合わせて強弱やリズムの真似っこを、次第に音楽の流れを子どもたちに委ね、即興的に音楽を作っていくというものだ。

太鼓を渡されたときは何をするのかと緊張していた子どもたちであったが、音楽が始まると徐々にほぐれていき、和太鼓特有のリズムを刻んだり円の反対側へいる仲間に音を送り合ったりと、遊びながら演奏をするようになった。ドラムサークルでの演奏は20分以上続いた。子どもたちと新野さんがだんだんと音楽で会話していく様子が印象的であった。

〈30周年記念／コンサート〉

30周年記念の事業は、午前の部、午後の部に分けられ、午前は記念式典と院内町出身の桂文治さんの落語独演会、そして午後に新野さんのコンサートが開催された。コンサートの構成は、前半は新野さんによるファミリー向けのプログラム、後半は童龍太鼓とのコラボレーションの２部構成である。

前半のプログラムでは、「初めての打楽器コンサート」というテーマで、珍しいものから身近なものまで、演奏を交えながら様々な打楽器の紹介をした。また前半の最後では、マリンバの演奏に合わせて会場の皆さんにボディパーカッションで演奏に参加してもらったのだが、ノリの良いラテンの曲調と可愛らしいボディパーカッションの振り付けに会場はおおいに盛り上がっていた。子どもから大人まで、会場の皆さんがノリノリで参加してくれて、とてもあたたかい空間であった。

後半は童龍太鼓とのコラボである。コラボは、新野さんのアイディアで、もともとの和太鼓の楽曲に新野さんがマリンバや西洋打楽器で音を乗せていく形をとった。

童龍太鼓と共演するにあたり、前日までに２回のリハーサルを行った。子どもたちが叩く和太鼓からは凄まじいエネルギーを感じた。厳しい練習を重ねてきたのだろう、魂がこもっている一音一音に圧倒された。リハーサル中、新野さんは「単に演奏を合わせるだけではなく、お互いの息遣いや音楽の流れを感じとって演奏しよう」ということを子どもたちへ伝えた。その話をしてからか、何度か合わせていく中で、新野さんと童龍太鼓の子どもたちが互いの存在や音楽を感じ合いながら演奏していくようになっていった。

本番の演奏は本当に本当に素晴らしかった。童龍太鼓の子どもたちと新野さん、彼らの音楽のかけ合いが重なり、圧巻の舞台であった。

〈おわりに〉

この30周年記念では、ホールが誕生してからの30年間、式典や成人式などの大事な行事の会場として、日々の活動場所として、多くの人々が集い愛してきたことを実感した。院内で過ごした４日間で、担当の真川さんと桐畑さんをはじめ、職員の皆さまから地域への思いや地元に住まう方々への眼差しを目の当たりにした。また、地元の皆さまが地元を愛し、地域の若い芽（桐畑さんのような！）をあたたかく見守る姿を間近で感じた。人々が住んできた歴史と今まさに紡いでいる時間、そして人と人とのつながりが“地域創造”の宝物なのだと感じたおんかつであった。

この30年間を通して人々や季節と共に生きてきた院内交流ホール。40年、50年と、これからも地域と人とともに歩んでいく姿を、見続けていたいと思った。

第３部
令和４年度公共ホール音楽活性化事業（おんかつ）コーディネーター・アドバイザーレポート

小澤櫻作（上田市交流文化芸術センター　プロデューサー、平塚文化芸術ホール開館準備アドバイザー、竹田市総合文化ホールグランツたけた チーフプロデューサー）

持続可能な事業運営と人材育成から見たアウトリーチ

今年度担当をさせていただいたアルカスSASEBO（佐世保市）でのおんかつ事業。アルカスSASEBOさんはハイスペックの劇場で2001年の開館以来様々な事業を展開している九州を代表する公共ホールだ。個人的には地域創造に勤務していた時のルーキーイヤーにお邪魔したホールさんをおんかつ事業でコーディネーターとして担当することになり少々緊張… 今回、そんな気持ちを抑えてお邪魔させていただきました。

アルカスSASEBOさんは、国内のトッププレイヤーによるアルカスSASEBOオリジナルの室内楽グループによる定期演奏会など本格的で華麗な公演に加え、伝統あるジュニアオーケストラや地元アーティストによる親しみあるアウトリーチ活動など様々な事業を展開されてきた一方で、今回のおんかつ事業のように、自らの役割を考え、創り、地域と繋がっていく事業に取り組んできた実績はあまり多くないとのこと。

今回、そうしたアルカスSASEBOさんで、フレッシュさと経験のバランスがちょうど良い中堅スタッフの皆さまが悩み、考えながら創ったおんかつ事業は「大成功」と言える内容でした。そうした素敵な仲間と環境、時間のなかでアウトリーチに関する近年の公共ホールの課題について考えてみました。

持続可能な事業運営 ～ 数十年に一度の事業評価の転換期を迎えようとしている

これまでの公共ホールの自主事業では、「来場者数」を評価軸とした公演が主流でしたが、「持続可能性」や「パーパス経営」などが求められる現代社会においては、そうした公演のみでの事業展開には限界が近づいてきており、近年では、そこに「持続可能な成長」や「存在意義」、「収支のバランス」を評価軸に加えることができる事業への取り組み、新たな事業展開、それらに対応できる人材の育成が求められています。

これから迎えることになるであろうこの「数十年に一度の事業評価の転換期」を乗り越えて行くことは容易なことではありません。

前者の「来場者数」を評価軸とした事業では「出演者を主役としたブランディング」が非常に効果的で事業担当者には舞台業界内の情報収集力や広域的なPR力などが求められてきましたし、これからも必要です。

後者の「持続可能な成長と収支のバランスがとれた事業」の実現のためには「ホールを主役としたブランディング」と「作業の簡素化」が必要となることから、事業担当者には「劇場の役割や存在意義を考え、立案し、活動して、地域住民や設置者の理解を獲得していくこと」だけでなく「新規観客の獲得と定着」、「事業費の軽減」、「ファンドレイジング」など多岐にわたる業務やスキルだけなく「結果」も同時に求められていくことになります。

人材育成　～ 次代に向けて経営戦略を構築できる人材が求められている。

「ホールを主役としたブランディング」とは、決して、公共ホールのスタッフが主役となり自己PRをしていくことではありませんし、「出演者を主役としたブランディング」のように積極的に広域にPRしていくことでもありません。「PR」という単語を、パブリックリレーションズ＝地域とのより良い関係づくり＝地域の人たちとの共感を創り出すことと捉えて、企画、立案、活動し「地域から信頼されるホールになることで獲得できるブランド」だと私は思っています。信頼されるためには「持続可能性」

や「パーパス経営」などの経営的視点も必要になりますし、「劇場の役割と活動を見える化していくための企画力やプレゼン力」や「専門家としての知識や経験を活用して、地域に寄り添い親しまれることで新規観客の獲得、定着、育成を実現できる企画力や共感力」、「様々な簡素化に取り組み、効率的な事業の構築と働きやすさなど事業担当者への負担の軽減を図れる経営感覚」、「ファンドレイジング力」など、これまでになかった専門的で具体的な人材育成が必要だと考えています。

この「ホールを主役としたブランディング」の考え方を生み出した背景としては、(*指定管理者制度などに加えて*)「アウトリーチ活動の拡大定着」と「演奏家と公共ホールスタッフの距離が近づいたこと」が大きく影響していると考えています。今回のアルカスSASEBOさんでのおんかつ事業には「担当者の熱い思いに突き動かされる演奏家」という“おんかつ事業の原点“がありました。このように公共ホールのスタッフが自らの役割や存在意義を考え、地域に寄り添った事業を企画し、その企画を演奏家との信頼関係で育て活動していけば、その活動自体が「良きパブリックリレーションズ」になると、これまでにも多くの人が気がついているのではないでしょうか？

アルカスSASEBOのスタッフ皆さまから学んだこと

今回のアルカスSASEBOのスタッフの皆さまから「おんかつ事業に向けて、仲間と一緒にいっぱい考えた、みんなに相談した、話し合った、協力しあった。」とお聞きしました。

それらを通じて、劇場の役割や存在意義を考え、地域のこと知り、企画力やプレゼン力を高め、協力、簡素化などについて考える。など様々なことを自然と学んでおられるのだと感じました。加えて、「ホールコンサートでは新規のお客様が多く来られた」ともお聞きしました。反省会では「この新規のお客様を定着させていくためには何が必要か？」「もっと地域と繋がっていくためにはどのような活動が考えられるのか？」など次の展開を考えた意見もお聞きしました。

アウトリーチと人材育成、持続可能な事業運営は繋がっていると改めて感じることができる貴重な機会となりました。

コーディネーターレポート
丹羽　徹（一般社団法人日本クラシック音楽事業協会 常任理事 事務局長）

おんかつ事業にコーディネーターとして関わって20年。私自身が関わったおんかつ事業の現場は、年間平均２～３地域であり決して多い件数ではないものの、この20年を振り返り、今後のおんかつ事業の更なる発展に向けて思うところを記載しておこうと思う。

おんかつ立ち上げから数年は波瀾万丈とまでは行かないにしても凄まじい紆余曲折だった。今から24年前の事、当時はアウトリーチって何の事？何をするの？と、言った具合で、誰を対象に何処で何をするのか、そのノウハウも無い時代だった。おんかつ１期～３期位のアーティストやコーディネーター、そしてホールの担当者の各位には本当に様々な苦労をされてきたものと思う。それらの苦労や体験が現在の姿に繋がっている事は明らかだが、今でも良く話題になるのは、地域資源とは言うものの、良くも悪くも田んぼやトンネル等と言った最悪とも言える環境で､良くぞアウトリーチを実施したものと思う。現在では、アウトリーチの様々な手法が確立され、多様なスタイルが定着してきている。アーティストの多くも様々なノウハウを身につけており、コーディネーターも多くのスキルを備えており、このような場合はこう対処する、このパターンで進めるとこれが課題になると言った具合に、多種多様なアウトリーチ先に対応している。では何故このような経験が蓄積されたのか。私はおんかつ事業の実績のみならず、姉妹事業であるアウトリーチ・フォーラム事業の果たした役割は非常に大きかったと思う。ここではアーティスト側の視点で記載するが、フォーラム事業の特徴はアーティストがソリストではなくアンサンブルで取り組む事。アンサンブルだからこそ個々の考え方に留まらず､アーティストの相互理解、参加者とのコミュニケションを通じて、プログラム構成や手法の実践と再考のサイクルをコーディネーターやホール担当者が一丸となって作り上げる取り組みは、その後のおんかつアーティストや関係スタッフのスキルの向上に非常に重要な役割を果たしていたと思う。又、もう一つの重要なポイントとして、「地域で求められるアーティスト」と言う意義付けがなされた事も非常に大きな成果だと思う。プロを目指すにはあまりに厳しい音楽界に於いて、アーティストに地域という新たなキーワードと、公共ホールのプロデューサーとの接点とその協働作業は､アーティストに様々な気付きをもたらしたと思う。しかし、おんかつ立ち上げ時から今日まで、ホールとアーティストの置かれた環境は益々厳しさを増している。おんかつ立ち上げ時の平成11年の全国自治体数は3,232、その後の市町村合併等を経て現在は1,718と約1/2まで激減している。市町村合併の他に指定管理者制度も影響もあり、事業を実施できるような予算のある文化施設は確実に減少した。アーティスト側も、少子高齢化によりその数は確実に減少傾向にあり、音大の入試における定員割れや、コンクールやオーディションの応募者の減少にも顕著に現れている。しかし、全体の数は減少してきたとは言え、ホールもアーティストも、その質の高さと言うか、意欲というか、総体的なレベルは確実に向上している事は嬉しい事と言える。

先般、ある音楽雑誌にお客が戻らないドイツのオペラハウスの記事が掲載されていた。クラシックの主たる客層である中高年層がコロナをきっかけにコンサートに足を運ばなくなったと言う。特に欧州の中でもドイツを中心に、オペラは特にその影響を強く受けているようで、その打開策はあるのかと言った記事だった。これは、日本でも同様であり、日本クラシック音楽事業協会の調査では、公演回数では（対コロナ禍以前の2019年と比較）50%程度は回復してきているものの、観客動員数は1/3程度の回復率に留まっている。おそらく世界的に同様の現象が起きていると見て良いと思う。その一方で、日本ではコロナ禍を受けて、国民の文化芸術に対する価値意識はさらに高まっているとの報告もある。文化芸術は「次世代のために継承･継続する事は重要だ」70%､「国や地域のイメージ形成や、誇り･アイデンティティの醸成に重要だ」66%､「人と人を繋げる力、コミュニティを活性化する力がある」64.5%等、国民の支持は高い(文化芸術推進フォーラムによる調査報告)。これらの状況を踏まえ、コロナ禍から新たな文化事業に取り組もうと言う地域には、おんかつ事業はとても効果的であり、比較的取り組みやすい事

業だと思う。

ここ数日メディアでは岸田政権が打ち出した異次元の少子化対策のニュースが取り上げられている。その中で地域の出生率を上げた岡山県久米南町の施策が少子化対策奇跡の町として取り上げられていた。合併を契機に住民投票により町単独の道を選んだ事がきっかけとなり、町の将来を見据えた少子化と高齢者対策は必須との観点から、財源は町議の定数削減、補助金等のカットにより捻出し、小中学校の教材費や高校生までの医療費無償、高校生の就学支援金、子育て支援施設の開設、子供の一時預かりサービス等、住民参加型での取り組みが子育て応援の町として評判が拡がったようだ。これらの取り組みは小さな自治体だからこそ出来る非常にシンプルな仕組ではないだろうか。これを文化事業に置き換えるとすれば、全国展開しているような大規模な文化芸術事業は、それぞれの地域に合わせたカスタマイズは難しい。おんかつのような手作り事業だからこそ地域のオーダーに合わせたカスタマイズが可能になり、地域に寄りそう様々なスキルを身に付けたアーティストによるオリジナリティ高い事業を実施する事が可能になるのである。

コロナ禍は、地方移住の促進や、リモートワークの浸透等の社会環境に大きな変革をもたらした。これらの流れは、感染症からの再興の契機に、文化事業の存在感を社会に浸透させる絶好の機会として捉える最大のチャンスだと思う。クラシック音楽の愛好者層の多くを占めるのが高齢者層であるが、文化や芸術は、一定の年齢を経た上での娯楽と言う位置付けはいささか古い。文化や芸術は時代の先端をリードするものであり、若者は常にその流行に敏感だ。その流行を下支えするかのように、年々様々なデジタル機器の発達により、アートやカルチャーはもはや様々な社会生活に浸透し、切っても切り離せない関係となっており、この流れは益々加速して行く事は明らかだ。

文化と経済は表裏一体である。人が人たる上で育まれた文化芸術が持つ、人と人を繋げる力、コミュニティを活性化する力が、コロナ禍で見失ったものを再興させ、地域起こしの起爆剤や経済の活性化の一助となる。そんな文化芸術の活用が益々期待される時代になるだろう事を、私は確信している。

コーディネーターレポート
花田　和加子（keynote代表、ヴァイオリニスト）

クラシック音楽には人々の心を豊かにし、人生を豊かにしてくれる素晴らしい力があります。ですから、出来るだけ多くの方にその素晴らしい世界を体験・体感していただきたい。「いい音楽には言葉は要らない。まず聴いてみて！」と言いたいのですが、「有名な演奏家の本格的なコンサートを聴いてみたけど、よくわからなかった」という反応をよく耳にします。おんかつでお伺いしたホールの中にも、せっかく東京から一流の演奏家を呼んで本格的なコンサートを企画したのに「全くチケットが売れなかった」、「来場者の反応が芳しくなかった」というお話をよく伺います。確かに「コンサートに行ってよかった！」、「もう一度聴きに行きたい！」と思えるようになるためには多少の予備知識や事前のコンサート体験が必要な場合もあります。

しかし誰しも「初体験」はあるわけで、演奏家は一流、コンサートの内容も申し分ないにも拘らず反応が芳しくない場合、何が問題なのか？　それは、コンサートの提供の仕方です。予備知識が無く、初めてコンサートを聴くというお客さんには、作品（音楽）とお客さんの間をつなぐ橋渡し役が必要であり、それを担うのがアーティストです。そして、その役割を存分に果たすためには：

１．誰のためのコンサートか？
２．何のためのコンサートか（コンサートの目的は）？
３．対象者はどのような人たちか（どのようなニーズがあるのか）？

この３点の要素が必要不可欠であり、それらの情報をアーティストに唯一提供できるのがコンサートの企画者であるホール担当者さんなのです。つまり、アーティストがどれだけ説得力のある橋渡し役を務められるかはホール担当者さんからの情報提供にかかっているのです。今年度担当させていただいたおんかつでは、この連携プレイの重要性を改めて認識することになりました。

成田市おんかつでは、子供たちに音楽の楽しさを届けたいということで、初めてのチャレンジとなる未就学児も入場可能なコンサートを実施することにしました。担当の斎藤さんの思いを受けてアーティストの新野さんからはオフィシャルではない写真素材（アーティスト写真とは趣が異なる、楽器に囲まれた楽しそうな雰囲気の写真）を提供いただいたのを手始めに、コンサート内で使用する手作り楽器の作り方動画の作成や、公演当日、開演前にホールのロビーで実施した楽器作りコーナーでも新野さん自らが指導役を務めてくださったりと、参加した子供たちはコンサートの前から新野さんと触れ合うことができました。

コンサートは、様々な打楽器が繰り広げる豊かな世界を実感できるバラエティに富んだ本格的なプログラムを軸に、参加者が一緒にリズムを体感できるボディパーカッションや自分たちが手作りした楽器を用いた共演を盛り込んだ大変充実したものになりました。

一方の角田市では、まさに「クラシックはわからない」の壁に直面していました。市民のためのホールとして良質のコンサートを提供したいが、一流の演奏家を呼んで本格的なクラシック・コンサートを開催してみたものの、来場者の反応が今ひとつ…。この苦い経験から問題点を洗い出し：

１．演奏内容は妥協しない（あくまでも本格的なクラシックの作品にする）
２．それをどう聴いたらいいのか、どうやったら楽しめるのかをガイドする
３．クラシック好きな人だけが対象なのではなく、田園ホールが市民の皆さんのために企画した、皆さんのためのコンサートであることをアピールする

この３点をテーマに取り組みました。まずは年１回の自主事業として市民の皆さんが毎年心待ちにしてくれるような公演作りを目指し、クリスマスの時期に合わせた「大切な人と一緒に楽しむコンサート」として「大切な人へのメッセージ」を寄せていただくことで「市民の皆さんと一緒に作る」コンサートにしました。メッセージの呼びかけには竹多さん作成による動画メッセージをチラシのQRコードから観られるようにしました。

コンサートでは、竹多さんの歌声が聴こえた瞬間、客席全体が虜になるのが舞台袖にいても伝わってくるほどでした。声楽家としての圧倒的な存在感を披露する一方で、曲間には親しみやすい軽妙なトークが繰り広げられ、竹多さんのパフォーマンスによって緊張していたお客さんがリラックスし、どんどんと音楽の世界に引き込まれていくのがわかりました。まさに、竹多さんという橋渡し役を介してオペラの世界を垣間見るという仕組みを実現させることができました。それは、担当の浅野さんのこの公演に向けた熱い思いや、浅野さんやホールの職員の皆さんから提供された様々な情報（地域の皆さんはシャイな方が多い、等）があったからこそできたことだと思います。

おんかつにおけるホール公演の目指すところは「その街ならではのコンサート」作りですが、それはホール担当者さんやアーティストだけで作れるものではありません。双方が持ち寄る熱い思いや夢、知識や経験、アイデアや情報と、それらを基にした実りある意見交換によってのみ成り立つものです。今後も全国各地でホール担当者さんとアーティストによる連携プレイが展開されることを祈っております。

コーディネーターレポート
山本　若子（有限会社N.A.T取締役）

2020年以降の事業展開は計画しても実施できるのか？実施して生じるリスクをどうする？など、世情に大きく左右される状況があり、おんかつ事業についても中止や延期などの不安要素を抱えながらの準備に、実施団体の皆さまには大変なご苦労があったかと思います。加えて４月の全体研修会から現地下見において、幾度となく「企画の意図は？」「どんな思いでその企画に至った？」等々問われ、苦悶された方もおられたことかと思います。皆さま、本当にお疲れ様でした。

私が伺った大分県宇佐市、京都府舞鶴市、千葉県木更津市の皆さまもそんな心持ちになられたことと思いますが、振り返って感じるのは、ご担当者それぞれにやらねばならないこと、やってみたいこと、そして誰に届けたいのかを明確にお持ちだったな、ということです。

ホール開館30周年をお祝いする事業として、この年月をともに歩んできてくださっている地域の方々に対して。障害福祉の取り組みとして、障害があるがゆえコンサートに足を運びにくい方々や障害を持つ方に接する機会のない方々に対して。未就学児が楽しめるものとして、コンサート未体験の小さな子どもたちとお父さんとお母さんと兄弟姉妹に対して。それぞれ届けたい方々に対して企画を組み上げ、三者三様の充実した内容になりました。

「企画を考えよ」と課されると、無から有を生み出さねばいけないように感じ気が重くなりますが、もしかしたら企画というのは「あったらいいな」を届ける手段を考えることなのかも知れません。そしてその「あったらいいな」は、まちの人々と接する中で気付けるような、日頃の生活の中に落っこちているものなのかも知れません。ただ、その日常の中にあるものに気付けるよう、探し続けることと嗅ぎ当てる感受性が必要でしょうし、今年度担当した３つの市の皆さんはこの嗅覚の鋭さゆえに大成功を収められたのだと思います。

おんかつ導入では我々コーディネーターはじめサポート役が派遣されはしますが、アクティビティ先とのやりとりはご担当者に行っていただきます。下見後のアーティスト打合せを経てプログラムを実施する上でお願い事が生じた際、それがアクティビティ先にどのくらいお手間をかけることになるのか、どのくらいのご協力をいただけそうかなど、直接やりとりをされるご担当者にしか把握できないニュアンスがあります。今年度、下見の時に直接お話しできなかったアクティビティ先があり、ニーズ、子ども達の様子の聞きとり、会場設営の段取りなど全てをご担当者に委ねさせてもらいました。アクティビティ先へのお願いや教えて欲しい事項をお伝えし、いただいたお返事をこちらに伝えていただくのですが、内容を伝言のごとく右から左に流すのでなく、ご担当者の人を見る目でお返事の背景を想像して伝えてくださることで、アクティビティ先のモチベーションが見え、どこまでのお手間をお願いできるかのラインを測ることができました。実際､本番で伺った際にそのラインの答え合わせが出来る訳ですが、その精度のなんと高かったことか。企画段階だけでなく、感受性は常に成功のカギを握るのです。

この報告書の作成中、折しもWBC日本対イタリア戦も真っ最中。画面越しにも関わらず選手の気迫やワクワク感、そしてこの上ない全力のプレーが突き刺さる。おんかつにもこの要素があり、これを最大の使命と信じて取り組んできました。アーティストの渾身の演奏―人が思いを持って伝えようとすること―に心動いた経験は、人の思いを受け取る感受性を高め、受け取る経験をできたならば自分の思いを伝えることにつながり、それは人と人とが幸せに繋がる礎になる。

思えば私が初めておんかつセミナーを担当した際にテーマにしたのが感受性。感受性にはじまり感受性で締めたおんかつ人生。お世話になった皆さま、有難うございました！

コーディネーターレポート
赤木　舞（昭和音楽大学、武蔵野音楽大学他、講師）

ホールに求められる役割の拡大

2001年に文化芸術基本法（旧名称：文化芸術振興基本法）が制定されて20年余り、2012年に劇場法（劇場・音楽堂等の活性化に関する法律）が制定されて10年が経ちました。これらの法律が施行されてから、文化芸術に対する捉え方、公立の劇場・ホールに求められる機能が大きく変化しました。つまり、文化芸術の価値が多様化し、劇場・ホールが担うべき役割が拡大したのです。

「文化芸術は、それ自体が固有の意義と価値を有する」（「文化芸術基本法」前文）という本質的価値に加え、「文化芸術は、子供・若者や、高齢者、障害者、在留外国人等にも社会参加の機会をひらく社会包摂の機能を有している」（2015年第４次基本方針）という社会的価値、そして「文化芸術は、新たな需要や高い付加価値を生み出し、質の高い経済活動を実現するものであること」（2018年文化芸術推進基本計画（第１期））という経済的価値が明示された流れを受け、劇場・ホールはいわゆる芸術鑑賞型の公演だけでなく、０歳からのコンサート、ファミリーコンサート、バリアフリーコンサート、ワークショップ、人材育成等さまざまな事業を展開し、アウトリーチ事業に関しても社会包摂的要素や社会的効果を求められる側面が強くなったといえます。鑑賞、創造、市民参加等、芸術活動が行われる場としての劇場本来の役割は維持しつつ、それ以外の役割が拡大し続けているのです。このことは、1998年からスタートしたおんかつ事業にも少なからず影響をもたらしたと考えられます。

欲張りすぎずおんかつ事業に取組む

アウトリーチとは「手を差し伸ばすこと、手を伸ばした距離」という意味をもった英語から派生した言葉ですが、近年は「劇場や美術館などが館外で行う芸術活動。自ら劇場などに出向かない人々に対し、芸術に関心をもたせることを目的として、出張コンサートやイベントなどを行うこと」（デジタル大辞泉）と具体的な定義もみられるようになりました。おんかつをはじめとする20年以上にわたるアウトリーチ事業の発展よって、アウトリーチという言葉が社会に確実に定着したと考えられますが、公共ホールが実施するアウトリーチ活動は、その言葉の枠を越え、地域文化振興、教育、福祉、社会包摂、まちづくり、地域課題の解決など、目的が多岐にわたり複雑化しています。そのため、おんかつ事業においては、多くの目的を達成しようとするあまり、個々アクティビティの質の低下や、スタッフへの過度の負担など、思わぬ問題を引き起こす場合もあるので留意すべきです。

「幼稚園、小中学校、福祉施設等いろいろな場所で実施したい」、「楽器体験を提供したい」、「市民サークル（フラダンス、民謡等）とのコラボレーションをやりたい」など、アウトリーチの対象や内容を考える際に多方面へ眼を向けることで得られるメリットもありますが、前述の問題に加え、おんかつ事業の全体テーマは何なのかを明確にすること、人的、財政的に無理なく出来る範囲はどこまでかを把握することが非常に重要です。もし、アウトリーチ先の対象者にホール公演に来場してもらいたいと考えるのであれば、４回のアクティビティ先はある程度の統一感をもたせた方が、ホール公演のターゲットを明確にすることができ、アーティストもメインのターゲットに合わせたプログラムを組みやすくなります。一方で、アウトリーチ先とホール公演を切り離して考える場合もありますが、その場合はアウトリーチは社会包摂、ホール公演は芸術普及といったように目的を明確にし、双方を成功させるために的確に業務を遂行しなくてはなりません。アウトリーチ事業は継続性が大切ですので、欲張りすぎず、触手を伸ばしていくことが大切です。

今年度担当させていただいた、大阪府東大阪市と茨城県牛久市のおんかつは、どちらも地域のニーズに丁寧に対応し、度重なる調整を経てアウトリーチ事業を実施されました。アウトリーチ先との調整に試行錯誤されながらも、結果として次年度への発展性を感じるおんかつとなりました。公共ホールが、

ホール事業のみならず地域に対して様々な役割を果たさなくてはならない現在、ホールスタッフの方々が地域で奔走されている姿には本当に頭が下がります。スタッフの個々の強みを活かしつつ、他部署や地域の関係者と連携を図りながら、地域に求められる公共ホールとなっていくことを期待いたします。

コーディネーターレポート
仕田　佳経（一般財団法人　地域創造ディレクター）

今年度は三重県伊賀市と広島県海田町の２地域を担当させていただきました。伊賀市文化都市協会は「誰もが文化芸術に触れあえる機会」を目的として、ホールに来場するのが困難な高齢者や障がい者を対象に、音楽に触れる機会を提供するとともに音楽や生演奏の素晴らしさを感じ取っていただくきっかけ作りを目指しました。また、海田町は県内でも子育て世代が多く平均年齢が低い地域ということ、またクラシックコンサートを開催しても聴衆は高齢者がほとんどであることから、仕事や子育てで忙しく自分の時間の確保が困難であろう方々とその家族を主な対象に、音楽を聴いて興味を持ってもらうとともに、会館に目を向けてもらうきっかけとしたいという思いから企画を立てられました。どちらも地域・ホールにおける課題や問題点に向き合い、実施団体にとって新たな試みでアウトリーチやコンサートに臨んだおんかつでした。実施内容についてはサブコーディネーターによるそれぞれのレポートをご覧いただければと思いますが、事業終了後の振り返りでも、一定の達成感と共に今回の実施により発見できたこと、気づけたことがあった一方で、地域での課題に向き合っていくからこそ、今後の課題や反省点も伺えました。しかし、単年の事業実施では成果が見えづらい部分も多々あったのではないかとも思います。

事業の成果の部分は、公共ホールを中心に様々なコミュニティと相互関係を築いていく“おんかつ”の難しいところで、周囲の理解を得にくいところもあるかもしれません。しかし、全体研修会でもお話ししたように「継続」することが肝心で、地域における課題に向き合い、新たなことに挑戦されていくのであれば、なおさらです。事業実施による様々な変化が継続したことにより表れると思っています。

継続していくことにおいて重要な点は、まずは「ビジョン」を明確にすることです。「最終的にどうしたいのか」というところを見据えて、短期的な目標から中長期的なところまで視野に入れてみましょう。そのビジョンに対してどのようにアプローチしていくのか、また課題に向き合うことで、アウトリーチに行く場所や対象者の絞り込みが明瞭なものとなりますし、継続していくことの意義も見えてくるはずです。

一方で皆さんを悩ませるのは「財源確保」だと思います。先立つものがなければ事業継続も困難になってしまいます。助成金等含めた財源以外では、コンサートにおける入場料収入も大切になってくるでしょうから、ホール公演の集客ももちろん考えていかなければなりません。特にクラシック公演においては固定客や高齢の方がほとんどで、新たな客層の開拓や集客に苦労するという話はどの地域に伺ってもよく耳にします（この課題は私自身も長年抱えてきていることです…）。今回の事業で初めてご来場していただいた方、アウトリーチを経験したことでコンサートに興味を持ってくれた方に、次の機会にまた足を運んでいくためにも、継続したアプローチが必要だと思います。新しい聴衆を開拓していくにはどこに投げかけをしていけば良いのか、どのようなコミュニティと繋がれるのかなど、多くの可能性も秘めています。また、アウトリーチとコンサートをどう連携させるのか、広報・告知でどのように協力を仰ぐのか、なども考えていくと、担当者として様々なところにアンテナを張ることが必要になってきます。

担当者の方々は実際に現場を回られたことで、アーティストが間近で演奏することよるアウトリーチの影響・効果やクラシック音楽の持つ力を肌で感じ取っていただけたとは思いますが、「資料を見せたり言葉で説明してもなかなか伝わらない」「実際に体験していただければ」と感じられたこともあったのではないでしょうか。担当者だけの声だけでなく、一緒に伝えてくれる仲間を増やしていくことも多くの助けになります。手間も時間もかかる事業ですが、続けることで関わってくれる方、協力してくれる方が増えることでしょう。ぜひ内外に協力者を獲得していきましょう。事業のサイクルが出来上がる

までは大変なことも多いでしょうが、主催者側も聴衆者側にとってもコンサートが「習慣化」されるまで頑張っていただきたいと思います。

改めて事業の目的、事業の実施時期、アウトリーチとの関連性、コンサートの在り方から、実施したことによって見えてきたこと、手を加えなければいけないこと、削れることなどをさまざまな視点で検討してみましょう。継続することで少しずつ前進できるはずですから、その地域だからできることと習慣化を目指して今後も取り組んでいただければと思います。

アドバイザーレポート
大澤 寅雄（株式会社ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室）

アウトリーチを継続してきた２つの公共ホール

地域へのアウトリーチを実践する公共ホールの多くが、継続することの意義を理解しているものの、実際には継続の難しさに直面して断念するところも少なくありません。予算や人員体制などの限りある資源の中で、必ずしも直ちに集客効果に結びつくとは限らないアウトリーチに取り組み続けるためには、担当者の苦労だけでなく、組織内外の理解や協力なしには継続することが難しいと言えます。

今年度、アドバイザーからの報告は、長年アウトリーチに取り組んできた、同じ富山県内での２つの公共ホールの担当スタッフに話を伺い、どのような経緯でアウトリーチが始まり、継続することができたのか、また、継続したことでどのような手応えや成果を感じているのかをお伝えしたいと思います。

滑川西地区コミュニティホール（一般財団法人滑川市文化・スポーツ振興財団）

滑川西地区コミュニティホールと滑川市民会館の指定管理者である（一財）滑川市文化・スポーツ振興財団で、事業を担当する岡部清香さんに話を伺いました。滑川市文化・スポーツ振興財団が管理するホールの２施設はどちらも老朽化が進んでおり、自主事業の規模は小さいのですが、アウトリーチは平成26年から開始して毎年継続しています。

きっかけは、当時の市長が市町村アカデミー（全国の市町村を担う人材育成のための研修機関）で地域創造が共催したミニコンサートを体験したことでした。おんかつアーティストで打楽器奏者の野尻小也佳さんの演奏に触れた市長が「ぜひ一流の音楽を滑川市の子どもたちに体験させてやりたい」と、文化・スポーツ振興財団におんかつに申請するように指示があったそうです。

その翌年は自主事業で野尻さんの小学校へのアクティビティと公共施設でのコンサートを実施、平成28年度からおんかつに取り組みました。この後「今後も事業を継続し小学校へアクティビティに行くように、滑川市の子どもたちが一人残らず一流の音楽に触れる機会を与えてほしい」との市長の希望があり、市内の小学校４年生全クラスを固定的に対象として、現在まで継続しています。

氷見市芸術文化館（一般財団法人氷見市文化振興財団）

令和４年10月に開館したばかりの氷見市芸術文化館を管理運営する（一財）氷見市文化振興財団で、事業を担当する後藤和泉さんにもお話を伺いました。後藤さんご自身は氷見市の職員で、旧・氷見市民会館の閉館（平成27年１月）にも携わり、老朽化したホールの解体と新しいホールの整備という転換期に立ち会ってきました。だからこそ、新しいホールに迎え入れる観客を育てる必要性を強く感じたと言います。また、ホールの計画では文化芸術の振興だけでなく、教育、福祉、医療、観光など多分野と連携することが明記されており、いわゆる鑑賞事業だけではない事業展開を構想する中でアウトリーチが始まりました。

後藤さん曰く「荒野を耕す」ために、７年前に手探りでアウトリーチを開始し、トライ＆エラーを繰り返したと言います。３，４年目あたりから一人では対応が難しいアウトリーチの件数になり、市内の全ての小学校10校に赴くようになりました。近年は学校から「こんなことをやってよ」という提案をいただくようになったそうです。

継続してきたことの成果

滑川市の岡部さんと氷見市の後藤さん、お二人の話の共通点でアウトリーチを継続してきたことによる成果は、まず事業の定例化・恒例化によって、事業の開始当初よりも圧倒的に説明や手続きが軽減されスムーズになることが挙げられます。アウトリーチの担当経験のある校長先生や教頭先生などの管理

職が増加し、教員間でも情報が共有されるため、「アウトリーチ」という言葉に対しても、公共ホールとの連絡調整や打ち合わせにおいても、経験を重ねるごとに信頼感、期待感が高まります。

では、アウトリーチがコンサートの集客につながるのかと言うと、滑川市の岡部さんからは正直、厳しいようでした。ただ、アウトリーチを体験した児童が、友達とオシャレをして自分のお小遣いでチケットを買ってコンサートに来てくれたこと、アクティビティのあとにヴァイオリンを習い始めた子どもがいたことなど具体的なエピソードや、「クラシック音楽は、静かにお行儀よく聴かなければならないと思わずに、自由に聴いていい、『難しそう』という壁を作らないでほしい」というご自身の思いを語ってくれました。

一方、氷見市の後藤さんは、アウトリーチの経験をした子どもたちが、ホールのコンサートに来てくれている手応えを感じています。７年間継続してきたアウトリーチは新しく開館するホールの観客を創ることが目標にしてきたことは、「間違っていなかった」と言う後藤さん。「地道に種を蒔いてきたことがチケット販売に実っていると実感しています」。ただ、後藤さんにとっては集客のみがアウトリーチの目的ではないようでした。「真っさらの感性の子どもたちがアウトリーチで受けた経験は、しっかりと、一生脳裏に焼き付いているんです。その子が、いずれどこかで音楽と出会ったときに、『ホールに行ってみようか』という気になることもあるんじゃないかと」。

富山県内でアウトリーチを担当する２館の公共ホールのスタッフに話をお聞きして、担当者の熱意はもちろんですが、アウトリーチを継続することで初めて見えてくる手応えや、集客につなげるという短期的な目論見を越えて、地域の文化環境を地道に耕していくことの重要性を、改めて確認する機会となりました。